

ニチメン東京社友会

〒100-8691 千代田区内幸町2-1-1 飯野ビルディング 17F
URL <http://nmtkshayukai.hp.infoseek.co.jp/>
E-mail menkwa@sojitz.com

【目次】

2013年度新年賀詞交歓会のご案内	3
—双日㈱新オフィス案内図—	4
1. 2012年度 総会・懇親会開催（於 如水会館）	
① 会長挨拶	会 長 河西 良治 5
② 来賓御挨拶	双日㈱代表取締役社長 佐藤 洋二 6
③ 総会・懇親会報告	世話人代表 倉又 則夫 8
—付録 ；総会出席者リスト—	9
④ 2010年度事業報告及び収支報告並びに2011年度事業計画及び収支予算	11
2. 会員動向及びその他報告事項	
① 新規加入者	13
② 2012年度（2012年7月～2013年6月）年会費（3,000円）入金状況とお願い	13
③ その他報告事項	14
3. 慶弔関係	
① 平成25年度長寿表彰対象者	14
② 訃報 —物故者名簿—	15
4. 会員寄稿文	
① 忘れがたき先輩たち	丸山 修作 16
② インド雑感—2—インド旅日記	高尾 勝 18
③ 「東アジア共同体と上海協力機構（SCO）」	中川 十郎 21
④ 音楽そぞろ歩き（その3）	高木 恒久 24
⑤ （続々）イギリス徒然	柴田 隆 26
⑥ 『Jobsの本』と『Jobの本』	浜地 道雄 28
⑦ 書評2編	渋谷 義 29
5. OB会、同好会、同期会開催	
① 大阪社友会第2012年度総会・懇親会	林 靖 31
② ニチメン機友会	五月女 穰 32
③ ニチメン東京化工OB会	栗田 久彌 35
④ 俳句の会 『いろは句会』	宇治田 薫 37
⑤ ニチメン湘南グルメ会	新崎 盛晨 38
6. 弔辞および追悼文	
① 蜷川親秀さんを追悼する	坂本 晤 39
② 堀之内敬さんの思い出	長谷川 洋 41
③ 追悼：小川宇士雄さんを偲んで	園山 春一 43
④ 山本寧雄さんの事	高橋 正 44
⑤ 追悼：岩下恒則さん	埴生 榮勇 46
7. 社友会役員・世話人一覧表並びに連絡先	47
8. 双日㈱社友会関係連絡先	47
9. 編集後記	48

飯野ビル全景



ビル正面入口から受付フロアまでの
直通エスカレーター

*** 2013年度新年賀詞交歓会の御案内 ***

恒例の新年賀詞交歓会を下記要領にて開催いたします。

今年度は双日(株)の**新本社（飯野ビルディング）**での初めての会合です。
視察に絶好の機会でもありますので、多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

開 催 日 : 2013年 1 月 17 日 (木) 12:00～ (開場は11:30～)

会 場 : **双日株式会社・本社21階 大会議室**
(2124, 2125, 2126, 2127 会議室)
所番地——千代田区内幸町2-1-1 飯野ビルディング 内

アクセス : * メトロ千代田線・丸ノ内線「霞ヶ関」下車、**出口C3**
* メトロ銀座線「虎ノ門」下車、**出口9**

会 費 : **無 料** (軽食、飲物を用意致します。)

特記事項 (大切です!)

このビルはセキュリティ確保のため、**入館カード**がなければ入館出来ません。

目的の階まで行くには、必ず入館カードを使ってゲートを通る必要があります。

このカードは、お帰りの時も使いますので、失くさぬよう御注意願います。

- ① この頁は、入館カード入手のための引換券兼用としています。

新年会参加の方は、下の枠の中に氏名を記入の上、この頁を切り取って持参して下さい。

- ② 当日は、ビル3階の双日(株)の受付近辺にいる社友会の世話人にこの引換券を渡し、入館カードをお受け取り下さい。11時半から12時正午までの間は、3階オフィスロビーおよび受付の横に社友会世話人が居りますので、宜しくお願いします。万一、12時以降にお着きになられた場合には、双日(株)の受付嬢が対応致します。

(3階受付までは、ビル1階の正面入口から直通エスカレーターをご利用下さい。)

入館カード 引換券	
ニチメン東京社友会 会 員	氏 名

ゲート出入りの要領は、SUICAやPASMOの使い方と全く同じです。

* その他お問い合わせは会報末尾の「世話人一覧表」記載の世話人にお寄せ下さい。

** 以下報告致します。

ニチメン東京社友会の新事務所も、上記の双日(株)の17階に移転しました。

FAX: 03-6858-7216, Eメール: menkwa@sojitz.com

(以上)

双日(株) 新オフィス 周辺の案内図

〒100-8691 千代田区内幸町2-1-1 飯野ビルディング



地下鉄アクセス

メトロ千代田線・丸ノ内線「霞ヶ関」下車、出口C3

メトロ銀座線「虎ノ門」下車、出口9

2012年度社友会総会 会長挨拶

会長 河西良治



本日は、梅雨で荒れ模様の天気の中、このように多くのニチメンOBの方々にご参集頂きまして、厚く御礼申し上げます。

双日より、あす13日より開始される内幸町・飯野ビルへの記念すべきお引越で、超ご多忙の折りにも拘わらず、このたび社長にご就任なされた佐藤社長を始め、多くの経営陣の方々がご参集頂きまして、有難うございます。

佐藤社長、ご就任、本当におめでとう存じます。

新中期経営計画の2014年度経常利益目標・750億円に向かって、選択と集中による資源と非資源への投資をほぼfifty-fiftyに近づけると言うご方針を表明されておられまして、誠に心強く感ずる次第であります。

去る6月26日の双日株主総会に於ける株主質問に対するご応対も、誠に堂々かつ懇切丁寧なご采配ぶりには、強く心を打たれました。

さて、欧州の金融危機が世界的に大きな問題となっておりますが、考えてみればギリシャ・ローマ時代より延々数千年も続いている欧州人の長い歴史の一頁に過ぎません。必ずや、この難関を突破する方策を見出すであろうと、私は信じております。

我が国の景気低迷の出口のさっぱり見えない混迷が続いておりますが、政官民、打って一丸となり、更に一層の突っ込んだ努力を傾注して世界をリード出来る、超一流国に脱皮せねばなりません。

いずれに致しましても、今や将に世界が躍動する globalization の新しい時代に突入していることは間違いありません。将に総合商社・双日の出番の時代でありましょう。新社長のリーダーシップによる全社を挙げてのご飛躍を、心よりお祈り申し上げます。

また、ご来臨頂いております、元ニチメンマンの土橋特別顧問、長期に亘る双日トップとしてのご尽力、誠にご苦労さまでした。今後とも新しいお立場でのご活躍をお祈り申し上げます。

さて、私どものニチメン東京社友会は丁度6年前の2006年7月13日、この如水会館で設立総会を開催し、河西郁夫大先輩を初代会長に仰いで出立致しました。会員の皆様のご尽力と双日のご支援によりまして、同事業の目的である会員の動静把握と、慶弔事項の処理、会報・会員名簿の発行、websiteの運営、総会懇親会・新年会の運営、などなどに注力しており、設立当初よりの15名のサムライ、監事・世話人が交替することなく、しっかりと頑張ってくれております。

最後になりましたが、昨年の東日本大災害による多数の被災者の皆さんの、誠に悲惨な状況は未だに毎日続いております。その辛さは如何ばかりか、と心よりお見舞い申し上げます。昨年は皆様のご協力を得て、10万円の寄付を「あしなが育英会」を通じて行いました。今年も、お許しを願える範囲内で皆様のお力添えを頂きたく、募金箱を準備致しました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

それでは、ご出席の会員の皆様のご健勝と佐藤社長はじめ役員の皆様の方々の益々のご活躍を祈念申し上げて、ご挨拶とさせていただきます。

どうぞ皆様、本日は旧友と共に大いに enjoy なさって下さい。どうも有難うございました。

来 賓 御 挨拶

双日㈱代表取締役社長 佐 藤 洋 二



只今ご紹介に預かりました佐藤でございます。

この4月1日より、前任の加瀬から引継ぎまして双日の社長に就任致しました。

すでにご存知の方もいらっしゃると思いますが、私は財務経理の出身でございまして、営業経験が一度もない社長でございまして。商社での例としては丸紅の朝田社長がそのような経歴をお持ちだとお聞きしていますが、この双日ではかかる社長の初めての選任ということになり、色々な意味でご心配ご懸念があるのではと想像しております。先ずは最初の難関である6月26日の株主総会を何とか無事切り抜けて今日ここに立っていますが、これからのことは多少我慢もしていただき、温かく見守って頂ければと思います。本日はお時間を頂戴し、双日の業績と私並びに双日の役員がこれから担ってゆく課題を皆様にご披露申し上げて行きたいと思っております。

なお今回の総会をもちまして退任されました土橋前会長は、今後は特別顧問として双日に色々な形でのアドバイスをお願いする、また私共からもご相談を申し上げていくお立場になられます。私から見ていると、土橋会長の信念は「堅実に経営をする」という一言に尽きるのではないかと思います。そのために、ずらしてはいけない軸というものを私共に教えて頂いた、と感じております。このように非常に大きな財産を私共に残して頂いた土橋さんのご功績に対して、改めて御礼を申し上げたいと思います。どうも有難うございました。

さて、今回の株主総会の意義ですが、大きく言いますと2点ございました。一つは、前の中期経営計画『Shine 2011』、即ち2012年3月期を最終年度とする3カ年の総括です。次に今後の新たな3カ年計画としてお示しした経営計画、『2014～Change for Challenge～』という副題を取りました新中期経営計画を株主の皆様にお計りし、ご承認を得た、ということでございます。

ポイントは何であったかと申し上げますと、前の『Shine2011』はリーマン・ショック後の3カ年ということで、どうやって収益体質を取り戻すか、健全な財務体質のもとで収益企業としてもう一度やりなおして行けるかが大きな課題でありました。数字上の整理を致しますと、経常利益560億円、ネット利益250億円という目標を掲げて、そのレベルに引き上げてリーマン・ショック後の新たな基盤作りにチャレンジをして来た、ということでございます。結果はご存知のように、経常利益622億円、ネット利益はマイナス36億円、ということになりました。

経常利益622億円については、IFRSの新たな導入への準備のために、15カ月の決算をした子会社があり、3カ月分だけ余分に利益が含まれております。この点を除きますと、実質は542億円になります。それからネット利益のマイナス36億円については、繰延べ税金資産の取り崩し280億円があります。これは昨年の12月3日に法制が整ったこともあり、「適時開示」の下、将来の回収が危ぶまれると思われる税金資産の取り崩しを一気にやったもので、これを除きますと実質的には240億円位がネット利益ということになります。こういった数字の意味するところは、先程言いました『Shine 2011』の最終目標の560億円の経常利益に対して542億円、ネット利益目標250億円に対して240億円、といった位置づけになります。

これは、当初円高の見込みを平均して1ドル約90円と想定していたところ、実際は直近で1ドル80円を切る位の状況が続いて来たことのインパクト、その他、今回の引越に関する特別経費25億円と震災の影響であ

る50億円の下振れ要因、といったものを勘案致しました時に、経常利益542億円とネット利益実質240億円というのは、私共が標榜したものを実質的には立派に挙げ得た、というふうに総括しております。

とはいえ、赤字ということ自体は大きな問題であり、何故そうなったかと言いますと、繰り延べ税金資産というものを説明する必要があります。統合後の2005年に大きな損失を出して6,000億に近い損失処理をしました。同時に将来発生する税金を繰延べ税金資産という形で取り戻す為、法律で認められた試算に基づいて一種の未収入金として計上して、毎年これを「プラン」と称して見直し、これを計上し続けていました。いわゆる不良性の資産ではない、確実に将来発生する税金と相殺出来るものを資産として計上していました。ところが今回の税制改革では、今までの繰延べ税金のベースになる赤字を100%使ってはいけない、80%にしろ、20%は切り捨てろということになったのです。これはいいことではありますが、今の弊社にとっては一寸マイナスになって来ることであります。即ち、税率が下がったために今後発生する税金が低くなるということで、取り戻せる税額の還付が逆に減るということになります。

この税率が下がったことは、長期で見れば良いことなのですが、私共の短期のポジションに置き直すと、実はマイナスということになるわけです。こういったディテールを計算し直すと、将来戻って来るであろうと思われていた280億円はこの際損失処理すべきだ、という判断になったのであります。

先ほど申し上げた経常利益については、全てのセグメントでプラスに転じており、夫々の部隊ではしっかりと利益を挙げられるファンダメンタルズは概ね作れた訳であり、内容が悪いということはないと自負しております。とは言え、もう一度繰り返しになりますが、やはり赤字は赤字ということですから、こういったことがないように今後反省して行かなければいけない、と思っております。このようなものを今後どうやって回避して行くか、という私共の思いを込めて次の3カ年の新事業計画『2014～Change for Challenge～』を作っています。最終年度の利益を述べてみますと、経常利益750億円、ネット利益450億円、というのが到達点というふうに考えております。アセット全体を増やさずに今の資産のまま収益を上げること、ビジネスの内容はリターンを増やすようなものに変えてゆくこと、資源と非資源は、50／50というアセットの割り振りでリターンを上げてゆくこと、というのが私共の次の3カ年の計画です。

この結果を私共が実現した場合に何が得られるか、ということも皆で共有して、これをやってゆくということです。これは企業価値を上げるということであり、企業価値を上げる、ということは今の株価収益力を上げる、ということに他なりません。こういったことを企業として努力することによって、環境が整った暁には現状より良い株価が私共に反映される、というふうに持ってゆきたいと思えます。そのようなことを最終的な目的に標榜するこの3カ年というのが、私共の次の目標だということでもあります。

先程も河西会長のお話にありましたように、円高、加えてユーロ問題、その他中国の景気の低迷など、色々な要素が実はプラスよりもマイナスの方に作用するという事象がso far出ております。只、私共はリーマン・ショックとその後のかかる環境でも収益を稼ぐ体質転換を図ってきた訳でありますから、何としても安定した収益を実現するよう、今後も努力して参ります。

このように厳しい環境ではありますが、本日はニチメン社友会の皆様のお元気な様子を拝見し、また、私共は来週から新しい社屋で営業活動をスタートする時でもあり、元気というものを皆様と共有してやって行きたい、というふうに感じております。

最後になりましたけれども、ニチメン社友会の益々のご発展と、ご列席の皆様のご健勝を祈念致しまして、私のご挨拶とさせていただきます。

どうも有難うございました。

第7回ニチメン東京社友会総会・懇親会 報告

世話人代表 倉 又 則 夫

梅雨真只中、心配された天候も小康を得て、7月12日土曜日第七回総会・懇親会が今回も「如水会館」にて開催されました。

当時は前年9月に発足した民主党三代目の野田内閣が相次ぐ閣僚の不始末に依り早くも二度目の改造を行うなど政権の不安定さが目につく一方、近づくロンドンオリンピックでの日本選手の活躍が期待された時期でした。

会場には受付開始とともに多くの社友が参集し、久々に顔を合わせる喜び、笑いの輪が到る所で見られる中、定刻の12時に不束ながら小生が司会をつとめ、総会が始められました。冒頭、昨年の総会以降の一年間に彼岸に赴かれた方々のご冥福を祈り、全員で黙祷が捧げられました。毎年少なからざる方々を失うことは誠にさびしい限りです。

総会議事に先立ち、河西会長より双日(株)の御支援に感謝するとともに佐藤洋二新社長の御就任と新社屋への移転を祝し前途益々の発展を期待申し上げる旨の挨拶が述べられ、続いて榊山世話人より第六期の事業・決算報告、橋本監事に依る監査報告がなされ、出席全会員の承認を戴きました。又、第7年度の事業計画並びに予算についても全員の承認を戴きました。

又、当日を以って任期満了となった役員・世話人の改選の件も上程されましたが、最長6年を限度とする会則に抵触する大部分の世話人にも後継ボランティア無き為、已むなく暫定的に向う一年間の続投を参会者の声に応じ承認される形となりました。茲に改めてひと肌脱ごうと云う方を募る次第です。

双日(株)佐藤新社長の御挨拶は前掲の通りですが、財務マンらしく緻密・明瞭な、且つ温厚なお話振りで、我々OBにも安心感を与えてくれた次第でした。

第二部の懇親会は専属的司会者・浜口世話人の名司会で進行、先づは島崎副会長の音頭で乾杯、会食・懇談を待ちわびた時間帯が始まりました。今年も広がり益々明らかとなりつゝ、ある東北の地震・津波・原発被災を慮んばかり歌舞音曲なしの建前ながら、そこは一杯入るとひと節語り歌いたくなるのも人情、長老の望月さんの懐旧談、余興の名人・平岡さんの漫談をはさみ、談笑の渦は食事の質量とも豊富な内容と相まち、盡きる事なきが如くでありました。

楽しい時間はあっという間に過ぎ、終りは明るく元気に皆さんで中締め、皆さん帰り難き風情ながら来年の再会を約し、手前味噌乍ら成功裏に散会となった次第です。

これもみな司々で労をいとわず力仕事に盡力された世話人の方々のおかげと頭の下がる思いです。

尚、今回も東北震災被災者への義捐金募金をお願いした結果、57,550円の御芳志を戴きました。これに社友会の予備費と合わせ計10万円を昨年と同じく、『あしなが育英会』に寄付させて戴きましたこと御報告申し上げます。有難うございました。

又、今回も女性サポーターの方々には受付や募金その他で会の運営に大きなご支援・ご協力を頂きました。非会員でありながら御協力頂いた今井恵子さん、小堀裕子さん、また会員の中からは、木津奈緒子さん、滑川和子さん達が世話人チームを応援して下さいました。こゝに改めて厚く御礼申し上げます。

◎ 2012年7月12日開催 総会・懇親会出席者 名簿

[50音順、敬称略)

三介郎也孝明純章彦務雄生次一夫作藏夫幸三博博武徳孝司雄一造健晴策幸	太	昭龍雄昌	直匡	良	登洋俊憲忠修甲敏英博	正靖昌	敦正陽秀	邦健重	岡尾田本尾富本家合田間	山尾本	山浦嶋野江浦本井月島吹岸邑海木本古辺	平平廣廣深福福古星本本牧榊松松丸三三水溝宮宮村望矢矢山山吉吉吉立渡	ヒ	フ	ホ	マ	ミ	ム	モ	ヤ	ヨ	リ	ワ
雄次美郷実義一人雄久夫昭晃司一徳勝一久宏子雄啓昭彦雄三治喜光一郎英吉子郎男弘三紀郎覚一彦洋郎勇恭弘人		鐵統克美	京武幸佳郁忠	宏春正	亨恒允秀泰眞稔久幸申慎啓清舜十宣峻和捷照	松	喜	昭春	和榮信正義	藤藤一塚田谷崎水浦本定藤山我山原尾木木瀬田野尻中本門川木井尾川谷野川部村村野崎口爪島本川澤生口	分	佐佐三篠柴洪島清杉杉祐須陶曾園大高高高高高田田田塚東利豐永中中中滑南西西庭野橋橋羽橋長花埴浜林林	サ	シ	ス	ソ	タ	ツ	ト	ナ	ニ	ノ	ハ
和弥彦道治廣雄晨清格浩保一清造夫昭長利生三良雄作雄彦夫稔治彦司雄昭勲巳子徳明夫雄彌路勝幸伸穰司晤一三智	員	正聡正重豊	武盛	博謙	靖隆英	克海隆悦栗啓弘隆陸	良正泰英	正奈雄弘則次久量重靖	良	潤悦	木木井倉子利木崎島田永川澤原原村田木北保崎野平森山田村野西森田沢田西畑津嶋城又持田野西林枝女井本井藤藤	会	青青浅朝浅甘荒新幾池池石石石石今岩宇大大大大大沖奥小河数勝金亀川川木喜金倉倉栗越小小三五坂坂桜佐佐	ア	イ	ウ	オ	カ	キ	ク	コ	サ	
三介郎也孝明純章彦務雄生次一夫作藏夫幸三博博武徳孝司雄一造健晴策幸	太	昭龍雄昌	直匡	良	登洋俊憲忠修甲敏英博	正靖昌	敦正陽秀	邦健重	岡尾田本尾富本家合田間	山尾本	山浦嶋野江浦本井月島吹岸邑海木本古辺	平平廣廣深福福古星本本牧榊松松丸三三水溝宮宮村望矢矢山山吉吉吉立渡	ヒ	フ	ホ	マ	ミ	ム	モ	ヤ	ヨ	リ	ワ
雄次美郷実義一人雄久夫昭晃司一徳勝一久宏子雄啓昭彦雄三治喜光一郎英吉子郎男弘三紀郎覚一彦洋郎勇恭弘人		鐵統克美	京武幸佳郁忠	宏春正	亨恒允秀泰眞稔久幸申慎啓清舜十宣峻和捷照	松	喜	昭春	和榮信正義	藤藤一塚田谷崎水浦本定藤山我山原尾木木瀬田野尻中本門川木井尾川谷野川部村村野崎口爪島本川澤生口	分	佐佐三篠柴洪島清杉杉祐須陶曾園大高高高高高田田田塚東利豐永中中中滑南西西庭野橋橋羽橋長花埴浜林林	サ	シ	ス	ソ	タ	ツ	ト	ナ	ニ	ノ	ハ
和弥彦道治廣雄晨清格浩保一清造夫昭長利生三良雄作雄彦夫稔治彦司雄昭勲巳子徳明夫雄彌路勝幸伸穰司晤一三智	員	正聡正重豊	武盛	博謙	靖隆英	克海隆悦栗啓弘隆陸	良正泰英	正奈雄弘則次久量重靖	良	潤悦	木木井倉子利木崎島田永川澤原原村田木北保崎野平森山田村野西森田沢田西畑津嶋城又持田野西林枝女井本井藤藤	会	青青浅朝浅甘荒新幾池池石石石石今岩宇大大大大大沖奥小河数勝金亀川川木喜金倉倉栗越小小三五坂坂桜佐佐	ア	イ	ウ	オ	カ	キ	ク	コ	サ	
三介郎也孝明純章彦務雄生次一夫作藏夫幸三博博武徳孝司雄一造健晴策幸	太	昭龍雄昌	直匡	良	登洋俊憲忠修甲敏英博	正靖昌	敦正陽秀	邦健重	岡尾田本尾富本家合田間	山尾本	山浦嶋野江浦本井月島吹岸邑海木本古辺	平平廣廣深福福古星本本牧榊松松丸三三水溝宮宮村望矢矢山山吉吉吉立渡	ヒ	フ	ホ	マ	ミ	ム	モ	ヤ	ヨ	リ	ワ
雄次美郷実義一人雄久夫昭晃司一徳勝一久宏子雄啓昭彦雄三治喜光一郎英吉子郎男弘三紀郎覚一彦洋郎勇恭弘人		鐵統克美	京武幸佳郁忠	宏春正	亨恒允秀泰眞稔久幸申慎啓清舜十宣峻和捷照	松	喜	昭春	和榮信正義	藤藤一塚田谷崎水浦本定藤山我山原尾木木瀬田野尻中本門川木井尾川谷野川部村村野崎口爪島本川澤生口	分	佐佐三篠柴洪島清杉杉祐須陶曾園大高高高高高田田田塚東利豐永中中中滑南西西庭野橋橋羽橋長花埴浜林林	サ	シ	ス	ソ	タ	ツ	ト	ナ	ニ	ノ	ハ
和弥彦道治廣雄晨清格浩保一清造夫昭長利生三良雄作雄彦夫稔治彦司雄昭勲巳子徳明夫雄彌路勝幸伸穰司晤一三智	員	正聡正重豊	武盛	博謙	靖隆英	克海隆悦栗啓弘隆陸	良正泰英	正奈雄弘則次久量重靖	良	潤悦	木木井倉子利木崎島田永川澤原原村田木北保崎野平森山田村野西森田沢田西畑津嶋城又持田野西林枝女井本井藤藤	会	青青浅朝浅甘荒新幾池池石石石石今岩宇大大大大大沖奥小河数勝金亀川川木喜金倉倉栗越小小三五坂坂桜佐佐	ア	イ	ウ	オ	カ	キ	ク	コ	サ	
三介郎也孝明純章彦務雄生次一夫作藏夫幸三博博武徳孝司雄一造健晴策幸	太	昭龍雄昌	直匡	良	登洋俊憲忠修甲敏英博	正靖昌	敦正陽秀	邦健重	岡尾田本尾富本家合田間	山尾本	山浦嶋野江浦本井月島吹岸邑海木本古辺	平平廣廣深福福古星本本牧榊松松丸三三水溝宮宮村望矢矢山山吉吉吉立渡	ヒ	フ	ホ	マ	ミ	ム	モ	ヤ	ヨ	リ	ワ
雄次美郷実義一人雄久夫昭晃司一徳勝一久宏子雄啓昭彦雄三治喜光一郎英吉子郎男弘三紀郎覚一彦洋郎勇恭弘人		鐵統克美	京武幸佳郁忠	宏春正	亨恒允秀泰眞稔久幸申慎啓清舜十宣峻和捷照	松	喜	昭春	和榮信正義	藤藤一塚田谷崎水浦本定藤山我山原尾木木瀬田野尻中本門川木井尾川谷野川部村村野崎口爪島本川澤生口	分	佐佐三篠柴洪島清杉杉祐須陶曾園大高高高高高田田田塚東利豐永中中中滑南西西庭野橋橋羽橋長花埴浜林林	サ	シ	ス	ソ	タ	ツ	ト	ナ	ニ	ノ	ハ
和弥彦道治廣雄晨清格浩保一清造夫昭長利生三良雄作雄彦夫稔治彦司雄昭勲巳子徳明夫雄彌路勝幸伸穰司晤一三智	員	正聡正重豊	武盛	博謙	靖隆英	克海隆悦栗啓弘隆陸	良正泰英	正奈雄弘則次久量重靖	良	潤悦	木木井倉子利木崎島田永川澤原原村田木北保崎野平森山田村野西森田沢田西畑津嶋城又持田野西林枝女井本井藤藤	会	青青浅朝浅甘荒新幾池池石石石石今岩宇大大大大大沖奥小河数勝金亀川川木喜金倉倉栗越小小三五坂坂桜佐佐	ア	イ	ウ	オ	カ	キ	ク	コ	サ	
三介郎也孝明純章彦務雄生次一夫作藏夫幸三博博武徳孝司雄一造健晴策幸	太	昭龍雄昌	直匡	良	登洋俊憲忠修甲敏英博	正靖昌	敦正陽秀	邦健重	岡尾田本尾富本家合田間	山尾本	山浦嶋野江浦本井月島吹岸邑海木本古辺	平平廣廣深福福古星本本牧榊松松丸三三水溝宮宮村望矢矢山山吉吉吉立渡	ヒ	フ	ホ	マ	ミ	ム	モ	ヤ	ヨ	リ	ワ
雄次美郷実義一人雄久夫昭晃司一徳勝一久宏子雄啓昭彦雄三治喜光一郎英吉子郎男弘三紀郎覚一彦洋郎勇恭弘人		鐵統克美	京武幸佳郁忠	宏春正	亨恒允秀泰眞稔久幸申慎啓清舜十宣峻和捷照	松	喜	昭春	和榮信正義	藤藤一塚田谷崎水浦本定藤山我山原尾木木瀬田野尻中本門川木井尾川谷野川部村村野崎口爪島本川澤生口	分	佐佐三篠柴洪島清杉杉祐須陶曾園大高高高高高田田田塚東利豐永中中中滑南西西庭野橋橋羽橋長花埴浜林林	サ	シ	ス	ソ	タ	ツ	ト	ナ	ニ	ノ	ハ
和弥彦道治廣雄晨清格浩保一清造夫昭長利生三良雄作雄彦夫稔治彦司雄昭勲巳子徳明夫雄彌路勝幸伸穰司晤一三智	員	正聡正重豊	武盛	博謙	靖隆英	克海隆悦栗啓弘隆陸	良正泰英	正奈雄弘則次久量重靖	良	潤悦	木木井倉子利木崎島田永川澤原原村田木北保崎野平森山田村野西森田沢田西畑津嶋城又持田野西林枝女井本井藤藤	会	青青浅朝浅甘荒新幾池池石石石石今岩宇大大大大大沖奥小河数勝金亀川川木喜金倉倉栗越小小三五坂坂桜佐佐	ア	イ	ウ	オ	カ	キ	ク	コ	サ	
三介郎也孝明純章彦務雄生次一夫作藏夫幸三博博武徳孝司雄一造健晴策幸	太	昭龍雄昌	直匡	良	登洋俊憲忠修甲敏英博	正靖昌	敦正陽秀	邦健重	岡尾田本尾富本家合田間	山尾本	山浦嶋野江浦本井月島吹岸邑海木本古辺	平平廣廣深福福古星本本牧榊松松丸三三水溝宮宮村望矢矢山山吉吉吉立渡	ヒ	フ	ホ	マ	ミ	ム	モ	ヤ	ヨ	リ	ワ
雄次美郷実義一人雄久夫昭晃司一徳勝一久宏子雄啓昭彦雄三治喜光一郎英吉子郎男弘三紀郎覚一彦洋郎勇恭弘人		鐵統克美	京武幸佳郁忠	宏春正	亨恒允秀泰眞稔久幸申慎啓清舜十宣峻和捷照	松	喜	昭春	和榮信正義	藤藤一塚田谷崎水浦本定藤山我山原尾木木瀬田野尻中本門川木井尾川谷野川部村村野崎口爪島本川澤生口	分	佐佐三篠柴洪島清杉杉祐須陶曾園大高高高高高田田田塚東利豐永中中中滑南西西庭野橋橋羽橋長花埴浜林林	サ	シ	ス	ソ	タ	ツ	ト	ナ	ニ	ノ	ハ
和弥彦道治廣雄晨清格浩保一清造夫昭長利生三良雄作雄彦夫稔治彦司雄昭勲巳子徳明夫雄彌路勝幸伸穰司晤一三智	員	正聡正重豊	武盛	博謙	靖隆英	克海隆悦栗啓弘隆陸	良正泰英	正奈雄弘則次久量重靖	良	潤悦	木木井倉子利木崎島田永川澤原原村田木北保崎野平森山田村野西森田沢田西畑津嶋城又持田野西林枝女井本井藤藤	会	青青浅朝浅甘荒新幾池池石石石石今岩宇大大大大大沖奥小河数勝金亀川川木喜金倉倉栗越小小三五坂坂桜佐佐	ア	イ	ウ	オ	カ	キ	ク	コ	サ	
三介郎也孝明純章彦務雄生次一夫作藏夫幸三博博武徳孝司雄一造健晴策幸	太	昭龍雄昌	直匡	良	登洋俊憲忠修甲敏英博	正靖昌	敦正陽秀	邦健重	岡尾田本尾富本家合田間	山尾本	山浦嶋野江浦本井月島吹岸邑海木本古辺	平平廣廣深福福古星本本牧榊松松丸三三水溝宮宮村望矢矢山山吉吉吉立渡	ヒ	フ	ホ	マ	ミ	ム	モ	ヤ	ヨ	リ	ワ
雄次美郷実義一人雄久夫昭晃司一徳勝一久宏子雄啓昭彦雄三治喜光一郎英吉子郎男弘三紀郎覚一彦洋郎勇恭弘人		鐵統克美	京武幸佳郁忠	宏春正	亨恒允秀泰眞稔久幸申慎啓清舜十宣峻和捷照	松	喜	昭春	和榮信正義	藤藤一塚田谷崎水浦本定藤山我山原尾木木瀬田野尻中本門川木井尾川谷野川部村村野崎口爪島本川澤生口	分	佐佐三篠柴洪島清杉杉祐須陶曾園大高高高高高田田田塚東利豐永中中中滑南西西庭野橋橋羽橋長花埴浜林林	サ	シ	ス	ソ	タ	ツ	ト	ナ	ニ	ノ	ハ
和弥彦道治廣雄晨清格浩保一清造夫昭長利生三良雄作雄彦夫稔治彦司雄昭勲巳子徳明夫雄彌路勝幸伸穰司晤一三智	員	正聡正重豊	武盛	博謙	靖隆英	克海隆悦栗啓弘隆陸	良正泰英	正奈雄弘則次久量重靖	良	潤悦	木木井倉子利木崎島田永川澤原原村田木北保崎野平森山田村野西森田沢田西畑津嶋城又持田野西林枝女井本井藤藤	会	青青浅朝浅甘荒新幾池池石石石石今岩宇大大大大大沖奥小河数勝金亀川川木喜金倉倉栗越小小三五坂坂桜佐佐	ア	イ	ウ	オ	カ	キ	ク	コ	サ	
三介郎也孝明純章彦務雄生次一夫作藏夫幸三博博武徳孝司雄一造健晴策幸	太	昭龍雄昌	直匡	良	登洋俊憲忠修甲敏英博	正靖昌	敦正陽秀	邦健重	岡尾田本尾富本家合田間	山尾本	山浦嶋野江浦本井月島吹岸邑海木本古辺	平平廣廣深福福古星本本牧榊松松丸三三水溝宮宮村望矢矢山山吉吉吉立渡	ヒ	フ	ホ	マ	ミ	ム	モ	ヤ	ヨ	リ	ワ
雄次美郷実義一人雄久夫昭晃司一徳勝一久宏子雄啓昭彦雄三治喜光一郎英吉子郎男弘三紀郎覚一彦洋郎勇恭弘人		鐵統克美	京武幸佳郁忠	宏春正	亨恒允秀泰眞稔久幸申慎啓清舜十宣峻和捷照	松	喜	昭春	和榮信正義	藤藤一塚田谷崎水浦本定藤山我山原尾木木瀬田野尻中本門川木井尾川谷野川部村村野崎口爪島本川澤生口	分	佐佐三篠柴洪島清杉杉祐須陶曾園大高高高高高田田田塚東利豐永中中中滑南西西庭野橋橋羽橋長花埴浜林林	サ	シ	ス	ソ	タ	ツ	ト	ナ	ニ	ノ	ハ
和弥彦道治廣雄晨清格浩保一清造夫昭長利生三良雄作雄彦夫稔治彦司雄昭勲巳子徳明夫雄彌路勝幸伸穰司晤一三智	員	正聡正重豊	武盛	博謙	靖隆英	克海隆悦栗啓弘隆陸	良正泰英	正奈雄弘則次久量重靖	良	潤悦	木木井倉子利木崎島田永川澤原原村田木北保崎野平森山田村野西森田沢田西畑津嶋城又持田野西林枝女井本井藤藤	会	青青浅朝浅甘荒新幾池池石石石石今岩宇大大大大大沖奥小河数勝金亀川川木喜金倉倉栗越小小三五坂坂桜佐佐	ア	イ	ウ	オ	カ	キ	ク	コ	サ	
三介郎也孝明純章彦務雄生次一夫作藏夫幸三博博武徳孝司雄一造健晴策幸	太	昭龍雄昌	直匡	良	登洋俊憲忠修甲敏英博	正靖昌	敦正陽秀	邦健重	岡尾田本尾富本家合田間	山尾本	山浦嶋野江浦本井月島吹岸邑海木本古辺	平平廣廣深福福古星本本牧榊松松丸三三水溝宮宮村望矢矢山山吉吉吉立渡	ヒ	フ	ホ	マ	ミ	ム	モ	ヤ	ヨ	リ	ワ
雄次美郷実義一人雄久夫昭晃司一徳勝一久宏子雄啓昭彦雄三治喜光一郎英吉子郎男弘三紀郎覚一彦洋郎勇恭弘人		鐵統克美	京武幸佳郁忠	宏春正	亨恒允秀泰眞稔久幸申慎啓清舜十宣峻和捷照	松	喜	昭春	和榮信正義	藤藤一塚田谷崎水浦本定藤山我山原尾木木瀬田野尻中本門川木井尾川谷野川部村村野崎口爪島本川澤生口	分	佐佐三篠柴洪島清杉杉祐須陶曾園大高高高高高田田田塚東利豐永中中中滑南西西庭野橋橋羽橋長花埴浜林林	サ	シ	ス	ソ	タ	ツ	ト	ナ	ニ	ノ	ハ
和弥彦道治廣雄晨清格浩保一清造夫昭長利生三良雄作雄彦夫稔治彦司雄昭勲巳子徳明夫雄彌路勝幸伸穰司晤一三智	員	正聡正重豊	武盛	博謙	靖隆英	克海隆悦栗啓弘隆陸	良正泰英	正奈雄弘則次久量重靖	良	潤悦	木木井倉子利木崎島田永川澤原原村田木北保崎野平森山田村野西森田沢田西畑津嶋城又持田野西林枝女井本井藤藤	会	青青浅朝浅甘荒新幾池池石石石石今岩宇大大大大大沖奥小河数勝金亀川川木喜金倉倉栗越小小三五坂坂桜佐佐	ア	イ	ウ	オ	カ	キ	ク	コ	サ	
三介郎也孝明純章彦務雄生次一夫作藏夫幸三博博武徳孝司雄一造健晴策幸	太	昭龍雄昌	直匡	良	登洋俊憲忠修甲敏英博	正靖昌	敦正陽秀	邦健重	岡尾田本尾富本家合田間	山尾本	山浦嶋野江浦本井月島吹岸邑海木本古辺	平平廣廣深福福古星本本牧榊松松丸三三水溝宮宮村望矢矢山山吉吉吉立渡	ヒ	フ	ホ	マ	ミ	ム	モ	ヤ	ヨ	リ	ワ
雄次美郷実義一人雄久夫昭晃司一徳勝一久宏子雄啓昭彦雄三治喜光一郎英吉子郎男弘三紀郎覚一彦洋郎勇恭弘人		鐵統克美	京武幸佳郁忠	宏春正	亨恒允秀泰眞稔久幸申慎啓清舜十宣峻和捷照	松	喜	昭春	和榮信正義	藤藤一塚田谷崎水浦本定藤山我山原尾木木瀬田野尻中本門川木井尾川谷野川部村村野崎口爪島本川澤生口	分	佐佐三篠柴洪島清杉杉祐須陶曾園大高高高高高田田田塚東利豐永中中中滑南西西庭野橋橋羽橋長花埴浜林林	サ	シ	ス	ソ	タ	ツ	ト	ナ	ニ	ノ	ハ
和弥彦道治廣雄晨清格浩保一清造夫昭長利生三良雄作雄彦夫稔治彦司雄昭勲巳子徳明夫雄彌路勝幸伸穰司晤一三智	員	正聡正重豊	武盛	博謙	靖隆英	克海隆悦栗啓弘隆陸	良正泰英	正奈雄弘則次久量重靖	良	潤悦	木木井倉子利木崎島田永川澤原原村田木北保崎野平森山田村野西森田沢田西畑津嶋城又持田野西林枝女井本井藤藤	会	青青浅朝浅甘荒新幾池池石石石石今岩宇大大大大大沖奥小河数勝金亀川川木喜金倉倉栗越小小三五坂坂桜佐佐	ア	イ	ウ	オ	カ	キ	ク	コ	サ	
三介郎也孝明純章彦務雄生次一夫作藏夫幸三博博武徳孝司雄一造健晴策幸	太	昭龍雄昌	直匡	良	登洋俊憲忠修甲敏英博	正靖昌	敦正陽秀	邦健重	岡尾田本尾富本家合田間	山尾本	山浦嶋野江浦本井月島吹岸邑海木本古辺	平平廣廣深福福古星本本牧榊松松丸三三水溝宮宮村望矢矢山山吉吉吉立渡	ヒ	フ	ホ	マ	ミ	ム	モ	ヤ	ヨ	リ	ワ
雄次美郷実義一人雄久夫昭晃司一徳勝一久宏子雄啓昭彦雄三治喜光一郎英吉子郎男弘三紀郎覚一彦洋郎勇恭弘人		鐵統克美	京武幸佳郁忠	宏春正	亨恒允秀泰眞稔久幸申慎啓清舜十宣峻和捷照	松	喜	昭春	和榮信正義	藤藤一塚田谷崎水浦本定藤山我山原尾木木瀬田野尻中本門川木井尾川谷野川部村村野崎口爪島本川澤生口	分	佐佐三篠柴洪島清杉杉祐須陶曾園大高高高高高田田田塚東利豐永中中中滑南西西庭野橋橋羽橋長花埴浜林林	サ	シ	ス	ソ	タ	ツ	ト	ナ	ニ	ノ	ハ
和弥彦道治廣雄晨清格浩保一清造夫昭長利生三良雄作雄彦夫稔治彦司雄昭勲巳子徳明夫雄彌路勝幸伸穰司晤一三智	員	正聡正重豊	武盛	博謙	靖隆英	克海隆悦栗啓弘隆陸	良正泰英	正奈雄弘則次久量重靖	良	潤悦	木木井倉子利木崎島田永川澤原原村田木北保崎野平森山田村野西森田沢田西畑津嶋城又持田野西林枝女井本井藤藤	会	青青浅朝浅甘荒新幾池池石石石石今岩宇大大大大大沖奥小河数勝金亀川川木喜金倉倉栗越小小三五坂坂桜佐佐	ア	イ	ウ	オ	カ	キ	ク	コ	サ	
三介郎也孝明純章彦務雄生次一夫作藏夫幸三博博武徳孝司雄一造健晴策幸	太	昭龍雄昌	直匡	良	登洋俊憲忠修甲敏英博	正靖昌	敦正陽秀	邦健重	岡尾田本尾富本家合田間	山尾本	山浦嶋野江浦本井月島吹岸邑海木本古辺	平平廣廣深福福古星本本牧榊松松丸三三水溝宮宮村望矢矢山山吉吉吉立渡	ヒ	フ	ホ	マ	ミ	ム	モ	ヤ	ヨ	リ	ワ
雄次美郷実義一人雄久夫昭晃司一徳勝一久宏子雄啓昭彦雄三治喜光一郎英吉子郎男弘三紀郎覚一彦洋郎勇恭弘人		鐵統克美	京武幸佳郁忠	宏春正	亨恒允秀泰眞稔久幸申慎啓清舜十宣峻和捷照	松	喜	昭春	和榮信正義	藤藤一塚田谷崎水浦本定藤山我山原尾木木瀬田野尻中本門川木井尾川谷野川部村村野崎口爪島本川澤生口	分	佐佐三篠柴洪島清杉杉祐須陶曾園大高高高高高田田田塚東利豐永中中中滑南西西庭野橋橋羽橋長花埴浜林林	サ	シ	ス	ソ	タ	ツ	ト	ナ	ニ	ノ	ハ
和弥彦道治廣雄晨清格浩保一清造夫昭長利生三良雄作雄彦夫稔治彦司雄昭勲巳子徳明夫雄彌路勝幸伸穰司晤一三智	員	正聡正重豊	武盛	博謙	靖隆英	克海隆悦栗啓弘隆陸	良正泰英	正奈雄弘則次久量重靖	良	潤悦	木木井倉子利木崎島田永川澤原原村田木北保崎野平森山田村野西森田沢田西畑津嶋城又持田野西林枝女井本井藤藤	会	青青浅朝浅甘荒新幾池池石石石石今岩宇大大大大大沖奥小河数勝金亀川川木喜金倉倉栗越小小三五坂坂桜佐佐	ア	イ	ウ	オ	カ	キ	ク	コ	サ	
三介郎也孝明純章彦務雄生次一夫作藏夫幸三博博武徳孝司雄一造健晴策幸	太	昭龍雄昌	直匡	良	登洋俊憲忠修甲敏英博	正靖昌	敦正陽秀	邦健重	岡尾田本尾富本家合田間	山尾本	山浦嶋野江浦本井月島吹岸邑海木本古辺	平平廣廣深福福古星本本牧榊松松丸三三水溝宮宮村望矢矢山山吉吉吉立渡	ヒ	フ	ホ	マ	ミ	ム	モ	ヤ	ヨ	リ	ワ
雄次美郷実義一人雄久夫昭晃司一徳勝一久宏子雄啓昭彦雄三治喜光一郎英吉子郎男弘三紀郎覚一彦洋郎勇恭弘人		鐵統克美	京武幸佳郁忠	宏春正	亨恒允秀泰眞稔久幸申慎啓清舜十宣峻和捷照	松	喜	昭春	和榮信正義	藤藤一塚田谷崎水浦本定藤山我山原尾木木瀬田野尻中本門川木井尾川谷野川部村村野崎口爪島本川澤生口	分	佐佐三篠柴洪島清杉杉祐須陶曾園大高高高高高田田田塚東利豐永中中中滑南西西庭野橋橋羽橋長花埴浜林林	サ	シ	ス	ソ	タ	ツ	ト	ナ	ニ	ノ	ハ
和弥彦道治廣雄晨清格浩保一清造夫昭長利生三良雄作雄彦夫稔治彦司雄昭勲巳子徳明夫雄彌路勝幸伸穰司晤一三智	員	正聡正重豊	武盛	博謙	靖隆英	克海隆悦栗啓弘隆陸	良正泰英	正奈雄弘則次久量重靖	良	潤悦	木木井倉子利木崎島田永川澤原原村田木北保崎野平森山田村野西森田沢田西畑津嶋城又持田野西林枝女井本井藤藤	会	青青浅朝浅甘荒新幾池池石石石石今岩宇大大大大大沖奥小河数勝金亀川川木喜金倉倉栗越小小三五坂坂桜佐佐	ア	イ	ウ	オ	カ	キ	ク	コ	サ	
三介郎也孝明純章彦務雄生次一夫作藏夫幸三博博武徳孝司雄一造健晴策幸	太	昭龍雄昌	直匡	良	登洋俊憲忠修甲敏英博	正靖昌	敦正陽秀	邦健重	岡尾田本尾富本家合田間	山尾本	山浦嶋野江浦本井月島吹岸邑海木本古辺	平平廣廣深福福古星本本牧榊松松丸三三水溝宮宮村望矢矢山山吉吉吉立渡	ヒ	フ	ホ	マ	ミ	ム	モ	ヤ	ヨ	リ	ワ
雄次美郷実義一人雄久夫昭晃司一徳勝一久宏子雄啓昭彦雄三治喜光一郎英吉子郎男弘三紀郎覚一彦洋郎勇恭弘人		鐵統克美	京武幸佳郁忠	宏春正	亨恒允秀泰眞稔久幸申慎啓清舜十宣峻和捷照	松	喜	昭春	和榮信正義	藤藤一塚田谷崎水浦本定藤山我山原尾木木瀬田野尻中本門川木井尾川谷野川部村村野崎口爪島本川澤生口	分	佐佐三篠柴洪島清杉杉祐須陶曾園大高高高高高田田田塚東利豐永中中中滑南西西庭野橋橋羽橋長花埴浜林林	サ	シ	ス	ソ	タ	ツ	ト	ナ	ニ	ノ	ハ
和弥彦道治廣雄晨清格浩保一清造夫昭長利生三良雄作雄彦夫稔治彦司雄昭勲巳子徳明夫雄彌路勝幸伸穰司晤一三智	員	正聡正重豊	武盛	博謙	靖隆英	克海隆悦栗啓弘隆陸	良正泰英	正奈雄弘則次久量重靖	良	潤悦	木木井倉子利木崎島田永川澤原原村田木北保崎野平森山田村野西森田沢田西畑津嶋城又持田野西林枝女井本井藤藤	会</											

出席者合計147名（*＝役員・世話人**＝運営支援者）



倉又則夫世話人代表

第7回ニチメン東京社友会総会 懇親会風景



2011年度事業報告 及び 収支報告

(期間：2011年7月1日～2012年6月30日)

ニチメン東京社友会

I. 事業報告

	実績 (千円)	予算 (千円)
第6回 総会・懇親会開催 (2011年7月14日)	840	900
154名 参加		
会報・名簿の発行	858	750
11号 2011年12月15日発行、12号2012年5月15日発行		
ホームページの運用	312	300
第5回 新年会開催 (2012年1月16日)	513	600
127名参加		
慶弔行事	403	350
米寿 7名 の表彰を致しました。		

II. 収支報告

A) 収入の部

1. 会 費	1,749	1,800
2. 双日助成金	2,300	2,300
3. 寄 付	25	0
4. そ の 他	0	0
合 計	4,074	4,100

B) 支出の部

2. 新年会開催	513	600
3. 会報・会員名簿の作成	858	750
4. ホームページの運用	312	300
5. 会員慶弔	403	350
6. 世話人会の運営経費	235	300
7. 事務所運営経費	619	750
8. 予備費+雑費	35	100
合 計	3,815	4,050

C) 繰越金及び預り金の部

当期収支残高	258	50
前期繰越金	1,961	1,961
当期末繰越金残高	2,219	2,011
次年度以降年会費等	530	
双日次年度助成金	575	
預り金残高	1,105	
合 計	3,324	

2012年度事業計画 及び 収支予算

(期間：2012年7月1日～2013年6月30日)

ニチメン東京社友会

I. 事業計画

	予算 (千円)	前期実績 (千円)
第7回 総会・懇親会開催 (2012年7月12日)	9 0 0	8 4 0
会報・名簿の発行 ・会員名簿も発行いたします。	1,0 0 0	8 5 8
ホームページの運用	3 0 0	3 1 2
第6回 新年会開催	6 0 0	5 1 3
慶弔行事 長寿者表彰予定者 4名	3 5 0	4 0 3

II. 収支予算

A) 収入の部

1. 会 費	1,7 0 0	1,7 4 9
2. 双日助成金	2,3 0 0	2,3 0 0
3. 寄 付	0	2 5
4. そ の 他	0	0
合 計	4,0 0 0	4,0 7 4

B) 支出の部

1. 総会開催	9 0 0	8 4 0
2. 新年会開催	6 0 0	5 1 3
3. 会報・会員名簿の作成	1,0 0 0	8 5 8
4. ホームページの運用	3 0 0	3 1 2
5. 会員慶弔	3 5 0	4 0 3
6. 世話人会の運営経費	3 0 0	2 3 5
7. 事務所運営経費	7 5 0	6 1 9
8. 予備費+雑費	1 0 0	3 5
合 計	4,3 0 0	3,8 1 5

C) 繰越金及び預り金の部

当期収支残高	-3 0 0	2 5 8
前期繰越金	2,2 1 9	1,9 6 1
当期末繰越金残高	1,9 1 9	2,2 1 9
次年度以降年会費等	0	5 3 0
双日次年度助成金	0	5 7 5
預り金残高	0	1,1 0 5
合 計	1,9 1 9	3,3 2 4

振込先は、下記いずれかを利用して下さい。(振込手数料は各自ご負担願います。)

1) 郵貯銀行

口座番号：00100 - 4 - 318041
口座名義：ニチメン東京社友会

2) 三菱東京UFJ銀行東京営業部

普通口座
口座番号：8225155
口座名義：ニチメン東京社友会代表倉又則夫

振込に際しましては、振込者名欄にご自身の名前を最初に左詰めにて記載願います。

(ネンカイヒ、ニチメン、XXネンドカイヒ等の記載があると振込者名が通帳に記載されず、振込者が特定できません。)

(註1) 長寿会員は年会費免除になっておりますが、長寿会員からご送金を頂いた場合は当会へのご寄付とみなし処理させていただきます。(会運営上大変助かります)

但し、何らかの手違い等であれば事務所までご連絡下さい。

(註2) 長寿者氏名 (50音順敬称略):

石川勝美、井本公一、岩居宏一、大野久生、大村譲、柿本寅之助、河西郁夫、加藤信一郎、門松孝、上条達雄、北村俊夫、国領和彦、近藤貞一、佐藤信世、椎木与志也、鈴木明、鈴木邦治、西尾敬一、西田啓一、藤田一郎、古川熙、松田好生、望月昌徳、山木重貞、山口富治、山口富美子、山口良孝　　以上27名

(註3) 2013年度(2013. 7～2014. 6)年会費納入済会員(50音順敬称略):

赤澤宏哉、浅子豊治、石原清、井田龍夫、伊藤尚志、岩田功、大谷毅丈夫、亀田昭、京野勉、
下浦通洋、塚田尚、平井出良彦、福井芳樹、藤井宏憲、松崎利夫、宮田信雄、山田博一、吉田敬三、
鏑木順治郎　　以上19名

[illegible]

その他連絡事項

東日本大震災による震災遺児への義捐金

総会でワンコイン募金（500円以上）を呼びかけ集まった義捐金（57,555円）に予備費を加え、昨年同様あしなが育英会の“あしなが東日本大地震・津波遺児募金”へ10万円を寄付いたしました。

[illegible]

平成25年長寿者お祝い対象者リスト

(白寿 1914年生・米寿 1926年生)

白寿 対象者ない

米寿 相原 淑 1月 ・ 南部 晴雄 2月 ・ 諸橋 良吉 7月 ・ 宮田 信雄 9月

訃 報

(平成24年4月3日～24年11月30日) *印は非会員

ニチメン東京社友会

氏 名	出身部門	ご逝去年月日	享 年
伊 藤 益次郎※	不 明	2012年3月24日	83歳
川 崎 清	総 務	2012年4月3日	90歳
菅 生 宏 一	鉄 鋼	2012年6月12日	74歳
福 部 信 人※	鉄 鋼	2012年6月30日	76歳
伊 藤 幸 雄	機 械	2012年7月5日	83歳
蛭 川 親 秀	食糧・業務	2012年7月27日	86歳
小 川 宇士雄	業 務	2012年8月4日	75歳
堀之内 敬	役 員	2012年8月16日	80歳
石 東 吉 孝※	木 材	2012年9月7日	67歳
岩 下 恒 則	業 務	2012年11月24日	78歳

ニチメン大阪社友会

氏 名	出身部門	ご逝去年月日	享 年
有 森 正 則※	織 維	2011年12月23日	70歳
弓 削 昭三郎※	織 維	2012年4月14日	86歳
橋 本 嘉 之	財 務	2012年5月9日	87歳
石 田 喬	総 務	2012年6月26日	90歳
内 藤 朋 平	織 維	2012年7月11日	87歳
内 田 敬 三	総 務	2012年7月12日	92歳
浅 田 修 弘※	機 械	2012年8月1日	71歳
田 中 冶三郎	織 維	2012年8月20日	72歳
山 本 寧 雄	化 工	2012年10月30日	72歳
村 田 春 海※	織 維	2012年11月17日	78歳
八 木 達 也	食 糧	2012年11月17日	90歳
吉 田 英 俊	建 設	2012年11月18日	85歳

ご冥福を、お祈りいたします。合掌

忘れがたき先輩たち

丸 山 修 作



同じ職場に四十年も勤めていれば数多くの先輩を得る。私は昭和二十五年十月に日綿実業東京支店に入社し平成二年六月ニチメン本社を辞した。その間多くの先輩に薫陶を得た事に感謝している。

日常の厳しい勤務規律の中で時に見せる上司の温情の仕草をふと憶い出すと、何とも言えぬ微笑と僅かの哀愁を覚える。

その中で特に忘れがたい先輩が三人いた、

私は日綿に入社し東京支店の総務部に配属された。時の支店長は市野龍之助常務。毎年正月に支店長宅で得意先幹部の招待の席が設けられた。外国人も来る。総務部の若手は当然動員されて招待のお手伝い。学生時代進駐軍将校の宿舎ホテルトウキョウのフロントでアルバイトしていた私は下手な英語で外人の招待客のアテンドをしていた。其の後、暫らくして、突然二月一日付で機械部への転出辞令がもらった。後で分った事だが正月支店長宅での得意先招待に機械部の三宅孝雄部長も来ておられた。転出辞令受領時後日三宅部長より『市野支店長から新入社員で英語を喋るのがいるぞと聞いて直ぐ君の転出手続きをとった』と聞かされた。そして私のニチメン機械部社員としてのサラリーマン生活が始まったのである。

三宅部長は一口で言えば豪放磊落。そして酒豪であった、常に赤ら顔、朝出勤すると必ず部長席の後ろに架かってる鏡に自分の顔を映してパンパンと頬を叩き、目を見開くのが日課の始まり。それを合図に秘書の吉弘嬢が熱い渋いお茶を出した。私が酒が飲めない所為か、よく宴会に連れ出された。帰りのお供だ。帰りの車の中で、ベロンベロンに酔った三宅部長は隣に座っている私に抱き着いてペロペロと頬を舐める。

閉口して次から助手席に移ると今度は後ろから身体を乗り出し舐めてきた。これには参った。大体汚い。然し、西荻窪のお宅に着いて玄関に入る

と、そこでお待ちになっていたお母様から『孝雄』と厳しいお声が發せられる。とたんに一瞬直立不動になり『はい』と答えると送っていった私などは目もくれずそそくさと奥へ入ってしまった。玄関に迎えにでておられた、お母様と奥様に私は何度も頭を下げてお礼を言ってくれた。

機械部に土居公と云う東大出の友人がいた。どちらかと云うと遊び友達だったある日の昼下がり連れだって当時日本橋の交差点にあった白木屋の地下のニュース映画館にニュース映画を観に入った。サボリだ。一眠りして二人で映画館をでようとしたら入口のホールでぱったりと三宅部長に出会った

土居さんだったか私だったかどちらかが『同罪ですね』と言ったら『馬鹿野郎早く帰れ』と怒鳴られた。普段は厳しい上司だ。然し昭和二十八年パキスタンへ赴任される前日マイクで得意の相撲甚句を唄って社内に流した。女子社員の多くが大泣きをした。そして昭和二十五年五月の私の結婚式には奥様と共に仲人の労を執ってくれた。奥様は今年104歳、お元気で小平市に息子さん夫婦と暮らしておられる。

次に挙げる先輩の綽名は『咆哮するライオン』、社員の全てが恐れ慄いていた。その人は小坂俊吉常務。昭和四十二年小坂俊吉常務が米国ニチメン社長として赴任して来た。私は時に米国ニチメンシカゴ支店長。小坂社長赴任以来ニューヨーク本社員の戦々恐々とした状況がシカゴにも伝わって来ていた。小坂社長シカゴ支店訪問時のヒヤリングに備え想定問答集を作り社員に配り備えを固めた。支店の社員に決して後ろを見せるなど忠告した。案の定、馬鹿野郎呼ばわりの連続であったが各員懸命に奮戦した。作戦は功を奏した。小坂社長は一寸様子が違うなど云った表情を見せた。

唯その時シカゴ支店にはステンレス鋼の現地販売店を持ちステンレス鋼の現地販売をしていた。営業不振で膨大な損失を抱えていた。この現地販売網を何とかステンレス鋼の供給先である日本冶金工業の親会社住友金属を通じて住友商事に売りつけるべく考案していた。小坂社長には怒鳴られ乍らその指導の下作戦を実行した。その交渉の経

緯、結果の詳細は長くなるので省略するが物の見事に成功した。後日小坂社長は自分の腕を擦って『わしの腕捌きも未だ訛ってはおらんだらう』と祝いの席で威張っておられた。然しその損失を作ったステンレス鋼現地販売に就ての追及は厳しかった。

『この販売会社を作ったのは誰か。上田か土橋か』と問い詰めて来た。上田は上田俊一さん、小坂社長の2・3代前の米国ニチメン社長後のニチメン社長。土橋は土橋久男さん。私の前のシカゴ支店長で初代、当然の事ながら私はこう言い返した。『これは私の責任です支店次長として初めから最後まで現地販売会社の設立の審議に加わっていたのだから』と『嘘つくな』と目の前のテーブルを両手で持ち上げて叩き落とした。それでも頑として私の責任だと最後まで押し通した

既に専務になっておられた上田さんとの次期ニチメン社長を廻っての確執があったのかもしれない。その後も馬鹿野郎呼ばわりは続いた。机の電話が鳴った。

『こちら米国ニチメンシカゴ支店の丸山です。』と英語で答える。とたんに電話の向こう側で『馬鹿野郎、偉そうな事言うな』と怒鳴り声が聞こえる。『馬鹿野郎じゃシカゴ支店長は勤まりません。』『それもそうだ』と意外な返事が返って来た。2年で帰国された。帰国前シカゴ店は小坂社長を奥様と共にシカゴに招びして『歓送会を開いた』そして支店総員の拠出金でゴルフ靴を贈った。

小坂さんの没後神戸のご自宅を訪れた。奥様は『あの時主人は殊の外感動していました。その時の気持ちをその儘言葉に出して皆に伝えてくれたらどんなにか良かったか』と述懐しておられた。小坂さんは手が早く奥様にも暴力を振るっていたらしい。奥様のどちらかの耳は小坂さんに殴られてよく聞こえない。然しご自宅の居間には小坂さんの大きな写真が飾られていた。その前で奥様は楽しかった小坂さんとの生活、特に中国、米国での海外生活を楽しげに語られたのが印象的であった。

第三の忘れ難き先輩は土橋久男さん。土橋さんの昭和二十年大東亜戦争終戦時の肩書は大日本帝国海軍中尉であった。昭和十八年の戦時中東京商科大学（現一橋大学）より学徒出陣し海軍少尉で駆逐艦『冬月』に乗り込み、昭和二十年四月の沖縄水上特攻作戦に従事し旗艦大和の防禦に当たった、対空戦闘中肩に敵機の機銃弾を受けて負傷し

たが生還し、戦後復学して日綿実業に入社した。昭和二十二／三年当時財閥解体の為財閥系の大手商社はなく日綿実業の関西三綿の一つとして輸出入貿易額トップを誇っていた。多くの俊英学生が入社試験を受けたと聞く。土橋さんはその内の一人だったのであろう。初めてお会いしたのは昭和三十五年十一月私が米国ニチメンシカゴ支店に赴任した時で、土橋さんは支店長であった。暫らくして土橋さんの学識の豊かさ、そして使う英語の質の高さに舌を巻いた。アメリカでは乞食でも子供でも英語を話す。話す内容が問題だ。心して勉強して下さいと常におられた。

又、性格は温和そのもので、よくあれで沖縄特攻作戦に参加して駆逐艦冬月の機銃兵の指揮がとれたものと内心訝ることもあった。この作戦では戦艦大和の乗組員を含め約三千人の将兵が戦死している。土橋さんは斯うも語っていた。『三千人が戦死したのは事実だが三千人個人個人の死の真実は誰も知らない。それを目撃した人は事実に近い事を語るかも知れない。然し真実を知っているのは死んだ本人だけなのだ』と。人間常に謙虚であれと論しているかの様であった。仏の如き土橋さんは剣道の達人でもあった。生まれ故郷の信州諏訪にある諏訪尚美館道場の道場主であったり、ニチメン剣道部の創始者とも聞く。この様に文武両道の達人の域に達した人を他に私は知らない。

“奥様は津田塾出身で英語は勿論拔群、シカゴではよくご主人を宴会などで補佐されている御姿を拝見した。奥様は三年前に亡くなり土橋さんは奥様の後を追う様にして昨年夏世を去られた。

思いつくまま忘れ難い先輩の三人に就いて記述した。今やニチメンは遥か遠くの消えかかった存在になったが、良き先輩の面影は永遠に鮮明である。



インド雑感－2、インド旅日記

高 尾 勝

東京は暑い！ 8月上旬、どこだったか忘れたが土が焼けるような匂いを嗅ぎデリーの夏を想い出したが、今日26日は下旬なのにインドより暑い。

8月13日昼成田でSri Lanka航空に搭乗、約8時間半でColomboに到着、日本との時差はインドと同じく3時間半でまだ明るい夕方だ、私には1994年以来のスリランカ。

入国審査官とひと悶着。入国査証は10ドル、Transit旅客は査証不要と云うのがスリランカの規定だが、係官が我々の旅券を見るなり「あそこで査証を貰って来い」と云うので、連れのU-氏が「Transitだ、毎月この便を利用しているが、査証不要の筈」と反発。Colombo-Bangaloreの搭乗券、eTKT (Electronic Ticket Itinerary)、航空会社のホテル予約券を提示したので係官は納得したが、この間3-4分、上級係官が近寄って来たので「書類を要求してちゃんと見れば良いのに、査証云々と云うから揉めたが、けりはついたよ」と小生説明に苦笑いして離れて行った。

入国手続き終えて、スリランカ航空のサービスカウンターに向かう。カウンターの係員は

客が並んでいるのに、知り合いか何かの男が近づいたらお喋り。ホテルの迎えワゴン車も相乗り客が揃うまで10-15分待たせる。何もかも一昔前のインドそっくり。

嘗てのコロンボ空港の建物は鄙びて係官の対応も素朴で安らぎを覚えたものだが、何の変哲もないコンクリート作りで、規模はインドの大都市の空港と比べるべくも無く小さい。空港建物の前面を舗装の傷んだ道路が走り、道路の両側には安普請の土産物屋が並び安宿も幾つか目に入った。

空港から車で15分ほどでホテルに着いた。広い敷地のバンガロウ式ホテルで、レセプションはこじんまりした瀟洒な建物、客室も悪くない。敷地内を探検するとプールは勿論、

コンフェレンス・ルーム、ジム、撞球室、卓球室、のバンガロウもある。

8月14日夕方のスリランカ航空でインド Banga-

loreに向かう、1時間20分の旅。U-氏の会社の迎いの車で、Bangaloreの北西約60km, Tumkur郡 Tumkur Taluk村の会社に向かう、所要時間2時間弱。

U-氏はこの地にIT関係の子会社を7年前に設立し、現在日本人駐在員8-9名とインド人従業員約100名が働いている。7エーカーの広い敷地に駐在員用宿舍と隣接する来客用宿舍、立派な事務所が建っている。会社設立時道路が悪くてBangaloreから通いきれないなどの諸要因があったこともあり、氏は最初に7-8人が一度に入れる規模の日本式風呂付きの両宿舍を建設して駐在員を派遣、それから事務所を建設した。この風呂は在Bangalore日本人駐在員たちの垂涎の的になっているし、職住接近の利点で会社の駐在員は食堂での夕食後も仕事に戻ったりしている。因みに、U-氏の会社は双日とも取引がある由。

8月17日深夜Bangalore市内のYasvantpur 駅始発の夜行寝台車でChennai (Madras)

の南約150km、コロマンデル海岸 (Bengal Bay) の旧仏領だったPondicherry に向かう。

寝台車は日本のB寝台車と同じく向い合せの3段ベッド式だが、B車寝台車との基本的な違いは、車幅が広いのでB寝台通路の窓側に車輻の縦方向に同じく3段ベッドがある構造になっていること、不使用時 中段ベッドは下に垂れ下がって座席用背凭れになっていること、寝具類は車掌室で有料借り出し、遮蔽用カーテンが一切付いていないことなどである。

又、インド国鉄のReservation Sheetが面白い。



上述汽車（寝台車）の車内にて（U-氏と高尾）

始発駅 Yasvantpur と終点 Pondicherry の間に列車の停車駅は8駅あるが、Sheet には停車駅名、各駅への Scheduled Arrival/ Scheduled Departure, 更に Actual/ Expected Arrival・Actual / Expected Departure が表にして印刷してある。親切と云えば親切だが運行の不正確さに備えたものとも云えよう。

8月18日午前9時過ぎ Pondicherry 到着、約30分の延着だが単線鉄道ゆえの列車すれ違い操作など考えるとインドでは定刻着と見做してよいだろう。車中では色の黒い物静かなインド人ご夫婦と同席だった、夫人は英語の本を静かに読んでおりご夫婦の教養を偲ばせた。デリーには色が真っ黒な教養人は少なく、ボンベイ時代に身に付けたはずの、すっかり忘れていた常識－肌の色で人を評価してはならない－を思い出した。

Pondicherry は印欧混血娘と米人男性の恋物語の小説と映画（題名は忘れた）にも登場した街で、海岸沿いの現市役所など建物の並びは欧州の海岸都市の風景を思わせるもので、インドの他の都市とは趣が全く異なる。市の中心地の一部は小川を挟んで両岸に商店が連なりインドの他の都市では見られない構図になっているし、他のインドの都市に比べると街を歩いている人々に外国人と印欧混血人らしき者が多いのが目立つ。先進国の洒落たベーカリー兼喫茶室に負けない佇まいのフランスパンの店が1軒あり朝食を摂ったが、客は外国人と裕福そうなインド人。



Pondicherry の海岸通り

午後、Pondicherry の北約100km (Chennai の南約50km) のリゾート地 Mamallapuram に車で向かい Radisson Hotel に投宿。このホテルもバンガロウ式で広い敷地内には9ホールのゴルフコースもあるし、長さ100米余で左右に緩やかに曲がって

いる大プールの両側には芝生越しにバンガロウのベランダが面している。Chennai からの保養客が多いようである。この地は Resort Temple Bay と謂われ周囲には寺院が多く観光地でもある。

8月19日車を手配して寺院観光に出かける。

Deccan 高原が噴火したその昔の溶岩を切削・彫刻した寺 Mahabharata のヒーロ Arjuna が苦行したと伝えられる Arjuna's Penance, Five Rathas (五つの伽藍)、Dravida 式で8世紀に建立された Shore Temple を見学した。

Tamil Nadu の平野で溶岩岩山は珍しいので売物なのであろう。インドでも世間には余り知られ



Arjuna's Penance 寺脇の溶岩塊



Five Rathas



Shore Temple (Dravida 式8世紀建立)

ていないようだが、私の知るところでは、Tumkurの東約20キロの山中の地にもっと大きな溶岩の岩山があり家ほどの溶岩塊がごろごろ転がっている、又MumbaiからGujarat州に入った地点にも溶岩の岩山がある。

寺院観光料がIndian Rs.10, Others Rs. 250と云うのは観光振興の観点からは頂けない、西洋人観光客も窓口に指摘していた。

8月20日午前中、Chennai 空港から飛行機でBangaloreに戻る、所要時間45分。BangaloreからTumkurに向かう道中で路傍のトラック運転手達が屯している掘立小屋の茶屋に立寄り昔々のインドを経験した。給仕人は粉ミルク缶らしきものに紅茶をいれて右手に持って高く掲げ、下にさげた左手に空の缶を持って、大道芸人よろしくの動作で空中で紅茶を空き缶に移す、今度は左手を掲げて同じ動作をする。2-3回繰り返した後その紅茶を紙コップに入れて客に給する、値段Rs. 5。紅茶・砂糖・ミルクの混合を良くする為の動作である。

煮染めたような衣類のトラック運転手達は、グリース・ガンで車の足回りにグリース・アップ、荷台の荷物の固定作業、休息、夫々思い思いの行動をしている。日本の自動車はトラック・バスと雖もグリース・アップ不要だしエンジン起動用のクランク穴も付いていない。自動車学部麻雀学科卒を自称する私には繋ぎ服で車の下に潜ってグリースアップ、冬場にはクランク廻しをしたことが懐かしく思い出され感慨を抱いた。

掘立小屋茶屋を出て約30分後、座れる店で珈琲を飲もうと云うことで道路脇の喫茶店・レストランに立寄る。珈琲・紅茶1杯約Rs. 50、掘立小屋の10倍の値段。貧富格差を改めて考え込ながら又インドを経験した。私はエスプレッソを注文したのだが、Black coffeeを持ってきたので突き返したら改めてエスプレッソを給仕人が持ってきた。連れが先払いした勘定書きを見るとRs.10高いBlack coffeeになっている。勘定書きにはVATともう一種類の税が記入されている。レジと給仕人3名に対しRs. 10を返せと要求、彼らは税金も入っているのではと強弁、やり取りを聞きつけて出てきたマネジャーも同じような強弁をするので、壁に張り出してある各品目の値段・勘定書き記載の品目ごとの値段と対比しつつ税金は別項目になっていることを指摘すると、渋々Rs. 10(15相当)を認めたが、レジ担当は間違えてRs.20札を寄

越したので、又指摘。奴らには「恥ずかしい」「有難う」は無関係だし、日本人の鷹揚さ(?)を見くびっているようにも思える。

8月22日夜BangaloreからColomboに飛び、約1時間の待合せのTransitで23日昼成田着。Colombo空港のSecurity Checkは厳しく、ズボンのベルト、靴もX-Ray検査される。Sri Lankaは内戦終了後時間が経ってないから厳しいのかも知れない。

(備考)

1. 南印の気候

BangaloreはDeccan 高原の南麓海拔約800米常春の地、夏でも室内で汗ばむことは無い。U-氏の会社の事務所はコンピューター常温維持の為冷房設備があるが、宿舎に冷房は無い。今回のPondicherry/Chennai等Tamil Naduよりも東京の方が暑い。

2. 都市名が旧に復した幾つかの例を挙げる、インドでは新旧名が併用されている；

旧	新
Bombay	Mumbai
Calcutta	Kolkata
Madras	Chennai
Bangalore	Bangaluru
Pondicherry	Puducherry

3. Pondicherry

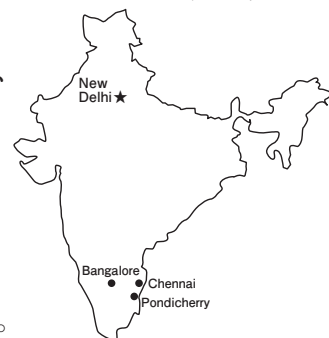
1672年仏領に、1954年インドに返還。

4 Dist-rictsで構成、大統領直轄地。

仏語はPondichery

4. 道路交通

インドのトラックは殆どTATA製だがこの20-30年進歩の跡が見られない。走行車線と追越し車線のトラックが両車とも過剰積載で馬力不足で氣息奄々、追越しもならず両車線を塞いで他車を苛立たせることも多いが、全般的に交通の行儀は徐々に良くなっている。TATA製乗用車「Indica」も追越し時の加速力が劣る。



「東アジア共同体と上海協力機構(SCO)」 ～アジア広域経済圏構築の観点から論ずる～

中 川 十 郎

1. 序論；

上海協力機構(SCO～Shanghai Cooperation Organization)は、1996年設立のShanghai Fiveを経て2001年にウズベキスタンの加盟で正式にSCOとして発足して以来、本年は2 Decade目に入るのを記念して第12回首脳会議を6月6～7日に北京で開催した。

この会議には議長役の胡錦濤国家主席をはじめ協力機構メンバー国の各大統領が、今後の10年間の意欲的な発展目標を掲げ、その実現に努力することを誓った。会議ではアフガニスタンをおブザーバー国(準加盟国)に、トルコをパートナー国として承認し、中央アジアにおけるメンバー国を拡大した。オブザーバー国はモンゴル、インド、パキスタン、イランに次いで5カ国に拡大する。また躍進著しいトルコをベラルーシ、スリランカに続き、対話パートナーとして受け入れた。今回は主催国の賓客としてトルクメニスタンのベルデイムハメドフ大統領も発言をした。さらに上海協力機構事務局長、地域対テロ責任者、国連、CIS(独立国家連合)、ユーラシア経済共同体、集団安全保障条約機構などの国際・地域機構の代表も参加。SCOがユーラシア、中央アジアにおける、無視できない有力な国際地域組織として浮上していることが伺える。この様な中央アジアでの趨勢に関し、最近の日本の通商関係では政財官学界が米国とのTPPに焦点が移り、日本の将来にも影響するユーラシア、中央アジアの経済統合の動きについては、いびつで認識のへだたりがあり、全方位の通商情報の収集を努力する必要があると思われる。

今次首脳会議ではSCOの長期的な平和構築と地域を共同で繁栄させる宣言に調印した。この会議の初の発展戦略の概要は次の通りである。

- ① 危機への早期警戒と共同対処策の強化
- ② エネルギー安全保障、ネットセキュリティ、分離独立派、宗教過激派、テロリストへの対応
- ③ 加盟国の貿易、投資の円滑化の推進。とくに金融、エネルギー、通信、農業の4大分野

の重点的な多国間協力の推進

- ④ 科学技術革新による、交通、物流センター建設の促進
- ⑤ 上海協力機構・開発銀行の設立による域内資金調達の円滑化



胡錦濤主席は経済発展と国際交流の促進のため、加盟国向けに100億ドルの借款と人的資源育成計画を発表した。

このように上海協力機構は域内諸国の協力のさらなる深化と広がりを見せつつある。

SCOは中国、ロシア主導でユーラシア、中央アジア経済共同体、協力圏としての色彩を強めつつある。同機構は世界人口の4分の1、ユーラシア大陸の5分の3を占める巨大経済機構としてASEAN以上に発展が予想される。SCO諸国は石油、ガス、鉱物資源、ウラン、レアメタルなどの重要資源の宝庫であるのみならず、地政学的にも重要な地域協力機構に発展すると予測される。

したがって、わが日本としては東アジア共同体に対する広域経済圏形成の見地からもSCOの動向については、今後とも十分注目すべきである。

2. 東アジア広域経済圏と上海協力機構

EU(欧州連合)は発展するアジアへの参入を狙い、ASEM(Asia Europe Meeting = アジアヨーロッパ会議)を1996年設立。2年に一回の首脳会議を開催し、私の命名する

Eurasia Horizontal Axis Trade Strategy(ユーラシア横軸貿易戦略)で、アジア、中国への接近を強化している。

一方、米国はオバマ政権下、躍進するアジアへの参入をめざし、TPP (Trans-Pacific Partnership) = 環太平洋経済連携) の実現に全力を注いでいる。私はこの戦略を America's Trans-pacific Horizontal Axis Trade Strategy (米国環太平洋横軸貿易戦略) と命名し、そのアジア参入戦略に注意すべきことを力説している。

さらにプーチン新政権下のロシアは9月のウラジオAPEC (アジア太平洋経済協力) 首脳会議を機会に、極東、アジア太平洋地域への進出を狙っている。

かかる状況下、日本としては米国のアジア進出戦略とは距離を置いた、日本独自のアジア、太平洋、中央アジア戦略を策定することこそ肝要であろう。

そのためには、ASEAN、APECのSub Regional Areaとして、東南アジア、西南アジアではメコン諸国との関係強化、これらの国を通じたメコン～インド輸送回廊の構築に尽力すること。

さらに上記、上海協力機構を中心とする、ユーラシア、中央アジアとの広域経済圏の構築に努力することが、躍進する中央アジア、北東アジアとの関係強化に必須であると思われる。このような状況下、日本としてもASEAN、APECとの協力に加え、アジア広域経済圏の観点からSCOの推移を注意深くWatchし、必要に応じ対話パートナーとして協力関係を強化することを提言したい。

以下、中国と並び上海協力機構の要であるロシアの動向を一瞥する。

上海協力機構の有力メンバーのロシアは2012年8月22日に念願のWTO(世界貿易機関)に156番目の国として加盟した。冷戦終結後の1993年に旧GATT(貿易と関税に関する一般協定)に加盟を申請して以来19年目に加盟が実現した。一足先の2001年にWTOに加盟し過去11年で驚異的な経済、貿易発展を遂げた中国と並び、今後ロシアがBRICSの枢軸国のひとつとして発展することが予想される。

ロシアは今年9月8～9日に極東のウラジオで初めてAPEC(アジア太平洋経済協力)首脳会議の議長国となった。躍進するアジア太平洋の

21の国、地域が参加するこの会議をホスト・議長国として開催したロシアは、APEC会議を梃子に、ロシア極東とアジア太平洋地域の経済協力、地域統合に積極的に乗り出す戦略を打ち出しつつある。

ロシアは日本と協力し、極東地域の資源開発やインフラ、港湾整備を促進し、極東・シベリア、サハリンからの石油、ガス輸出戦略を推進している。さらに港湾ターミナルや穀物貯蔵施設整備、シベリアと日本海沿岸を結ぶ、バイカル・アムール鉄道(バム鉄道)の輸送能力を2015年までに年3000万トンに倍増する計画を推進している。極東シベリアから日本海を通じたルートは日本への輸送日数が大幅に削減される。この計画にロシアは2兆5000億円の投資を計画しているという。

世界の物流にパナマ・スエズ運河並みの革命をもたらすとみられる北極海航路では氷が

薄い6～10月に昨年は世界で合計15回の運航があった。日本の三光汽船もロシアのムルマンスク港から中国へ鉄鉱石を運んだ。北極海航路を活用すると欧州向け運送費が4割削減でき、さらに航海日数も31日から25日に短縮され、アジア～欧州航路に物流革命が齎される。一方、ロシアの北極海バレンツ海の海底には中近東に匹敵する海底ガス、油田が埋蔵されているとの説もある。かかる観点からも日本としてはASEAN、APEC、TPPなどアジア太平洋中心の経済連携、経済共同体構想を拡大し、将来大きく発展する上海協力機構を中心とするユーラシア、中央アジアとの経済連携協定にも目を向けるべきである。

プーチン大統領は先の北京でのSCO会議でテロ対策など安全保障協力の強化を訴えた。

あわせ経済分野では上海協力機構開発銀行の設立により、大型協力事業の推進と物流など産業の発展の加速。加盟国企業による、国境地帯青年フォーラム開催を提案し、国際組織との結びつきの強化を強調した。

これまで中国が主導権を取って北朝鮮はじめ北東アジアとの経済協力拡大を努力してきたが、これらの地域でロシアは中国に対抗し、積極的な通商戦略を打ち出すとみられる。

一方中国の胡錦濤国家主席は「上海協力機構中期発展戦略計画」に基づき、加盟国の実務協力の促進と平和と安全確保を強調している。さらにSCOの地域経済発展の推進と協力を強化し、鉄道、道路、航空、通信、送電網、エネルギー、ガス、石油パイプラインの域内での接続、開発銀行、食料安全保障協力体制の構築、種子バンク、農業モデル普及基地建設、エネルギー共同体構築、投資と貿易の円滑化と拡大、科学技術、文化、教育、医療衛生分野の協力強化を目指している。

さらにSCO首脳は中央アジア非核地帯設置にも賛成の意向を示しているという。

このように2012年に動き出す極東アジアでの政治・経済の地殻変動の中、アジアのASEAN（東南アジア諸国連合）として10周年を迎え、近年急速に力をつけつつある上海協力機構（Shanghai Cooperation Organization-SCO）の動きにはさらに注目すべきである。

3. 結論；

アジア共同体構築とも関連し、アジア広域経済圏の観点から、日本としては、ASEAN+3に加え、そのSub Regional地域として上海協力機構との協力強化を図ることが、将来の日本の通商戦略上必須であると思われる。この観点からASEAN+SCOの複眼の思想で、SCOとの関係強化が必要である。

SCOにはBRICSの有力国でエネルギー資源も豊富な中国、ロシアが正式メンバーとして加入している。オブザーバーにはポストチャイナのインドが参加。さらに、近來、石炭、銅鉱石、金などの鉱物資源の開発および豊富な太陽光、風力発電の潜在力で脚光を浴びる蒙古、石油、ガスの豊富な埋蔵を有する世界的エネルギー供給国イランも参加している。このようにSCOはエネルギー共同体的様相も帯びてきている。

さらにアジア、中東、ヨーロッパの結節点として近來、にわかに脚光を浴びつつあるトルコもSC

Oの対話パートナーとして本年のSCO首脳会議で承認された。

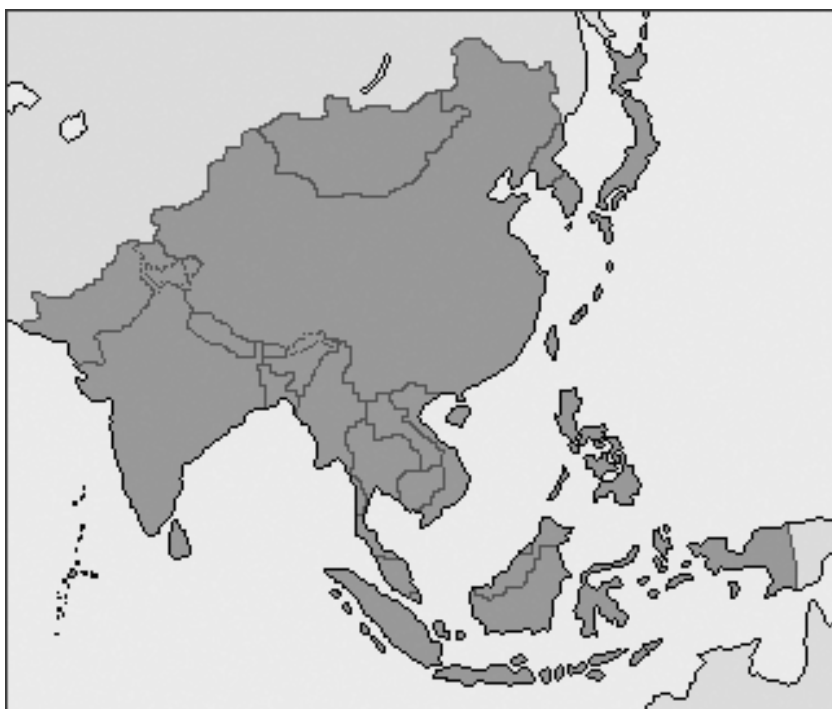
SCOはユーラシア、中央アジア諸国を結集し、ASEAN以上に強力な経済共同体、エネルギー共同体として登場しつつある。

ブレジンスキーは「ユーラシアを制するものは世界を制する」と喝破した。日本としても東アジア共同体のハブ・アンド・スポークとして上海協力機構との協力強化、友好関係構築に全力を投入すべきである。

欧米金融資本主義はギリシア、スペインなどのEUソブリン財政危機で破たんしに瀕している。米国も2008年のリーマンショックに端を発する金融危機で経済は低迷している。

日本も20年以上にわたる長引くデフレ経済不況により苦しんでいる。今こそ日本は欧米の金融資本主義、カジノ資本主義に決別し、アジアの新たな経済倫理に基づき、かつて渋沢栄一が唱えた「論語と算盤」の精神で、ASEAN諸国とSCO諸国を連結し、アジア広域経済圏の構築に尽力すべき時である。

かつて岡倉天心は「アジアはひとつ」と喝破した。今アジアが一つになる絶好の時期が到来している。今こそ日本の出番である。この千載一隅の好機を捉えるべきである。





音楽そぞろ歩き(その3)



高 木 恒 久

音楽コンクールの功罪

ちょっと古い話になりますが、1975年ショパン・コンクールではポーランドのツィメルマン君が優勝し、本命だったソ連のディナ・ヨッフエ嬢が2位になって終わった。実はこの決定の陰には陰謀めいた話があり、本当の優勝者はディナ・ヨッフエだったと伝えられます。ディナはソ連のラトビアから来た当時23才のユダヤ女性ですが、ソ連を代表する審査員M教授が、ディナの得票の一部をF嬢に回すことで、ポーランドのツィメルマンが1位に上がり、自分の教え子F嬢が3位に上がるよう仕組んだと伝えられます。

そのコンクールから35年も経った一昨年、ディナ・ヨッフエ女史が東京で、若いピアニストのための集中セミナーを開いていました。私はセミナーの主催者の親切で、ヨッフエに会いました。彼女と彼女の旦那であるミハイル・ワイマン（ヴァイオリニスト）と私の3人でセミナー会場近くの京王プラザで楽しいランチを囲みました。私はいろいろな話の後で、ショパン・コンクールのことも訊いて見ました。一瞬彼女は私の口から昔話が出たことに多少驚いたようですが、ディナは私に向かって、その通りのことがあったと云いました。

しかし、彼女が付け加えて云った事は、「過去の1位、2位は今や意味はなく、現在どれだけ優れた演奏をするかだけが問題です。今、ツィメルマンは大きく成長しました」と褒めており、私は彼女の心を知り安心しました。



ディナ・ヨッフエとミハイル・ワイマン（ヴァイオリニスト）
夫妻と新宿京王プラザホテルのレストランで

誠心の芸術家エリソ・ヴィルサラーゼ先生

先生はグルジアの名家の出で、ロシアの優秀なピアニストを多く育てたアナスタシア・ヴィルサラーゼの孫に当たります。エリソ・ヴィルサラーゼはシューマン・コンクールでの覇者だけあって、特にシューマンの演奏に秀で、誰も真似できない位置にあります。大ピアニスト、スビャトスラフ・リヒテルが生前「エリソのシューマン（演奏）を超える人を自分は知らない。彼女の域には自分も未だ到達していない」と云っていました。

6年前、彼女は自宅のあるミュンヘンからモスクワに里帰りして、ベートーヴェンの協奏曲4番を弾くと聞いたので、そのタイミングに合わせ私はモスクワに飛んだのでした。当時日経のモスクワ支局長だった栢さんを誘って、新しく出来たコンサートホールに駆けつけ、先生が受付に預けてくれた2枚のチケットで中に入りました。

オーケストラによる誰かの序曲の演奏に続いて、舞台上に登場した黒装束の先生の手が鍵盤に触れるや、豊かな美しい和音が会場を満たし、聴衆がそれに聴き入りました。なんと高雅な音だろう。この響きで彼女はいつも私たちを特別な世界に連れて行きます。その日もそうでした。私は聴きながら次第に夢でも見ているかのように音楽の中に溶け込みます。第2楽章に入ると先生はゆっくりとピアノから離れ大きな中庭に出て、植え込みの間を縫う様に歩きだす。夕陽が横から木々を照らし金色に輝いている様子をピアノが描き出している。私たちはそのあとについて歩くのでした。曲は転調しながら、やがて第3楽章に入ります。巨匠の力強い演奏は私の頭の中で様々に変化して、私はすっかり心を奪われて、夢を見ているような気持でした。

あとで栢さんが教えてくれたことは、あの美しい第2楽章が進行する間、高木さんはずうっと寝ていましたよ。どうやら旅の疲れに、素晴らしい演奏が重なって、私はアンダンテ・コンモート（ゆっくりと、だが一寸だけ速めに）の世界を彷徨いながら半分夢の中で聴いていたようです。



エリソ・ヴィルサラゼ先生と私

全てが終わるのを待って、私たちは楽屋を訪ねました。先生は私が態々モスクワまで出てきたことを大変喜んでくれました。私は栢さんを紹介して、直ぐ引揚げるつもりでしたが、先生が「一緒に行きましょう。理事長さんが晚餐を用意してるそうよ」と云われ私たちは従いました。理事長さんはニコニコと私たち3人を自室に案内してくれたのです。

20人ほどの人たちが既に集まっていて、テーブルには豪華なザクースカ（前菜）が並んで、私にとっては久々のロシア式ディナーでした。するとさっきから緋色のジャケットとスカートという変わった服装の紳士が我々に愛想よく話しかけ、シャンパンを注いでくれます。緋色の紳士は大変に楽しい紳士でした。ヴィルサラゼ先生は私に、彼がボリス・ザイツェフよと教えてくれました。ザイツェフとはロシアの服飾デザイナーのナンバーワンだという事は私も聞いて知っていました。

眠りながら聴いた音楽も素晴らしかったけれど、後に続いた宴会もまた楽しいものだった。乾杯のシャンパンがまたポン、ポンと音を立てた。

この時の楽しい光景を写した写真がある筈だが何処に仕舞い込んだのか残念ながら見当たらない。赤いスカートのザイツェフ氏、真ん中に先生。私が端に辛うじて入っている。これは同席したロシア人が親切に、私のカメラでシャッターを押してくれたのだが、その人は酔っていて、ファインダーの枠から何人かが食み出して画面に映っていないのです。

浜松で出会った日本のマドンナとフランスの美女。

数年前のこと、ヴィルサラゼ先生から突然家に電話があり、「今、浜松に居ます。コンクールの最中だが、明後日は私が弾きます。来れたらい

らっしゃい」と云われました。

いわゆる模範演奏を大先生が披露するのだ。是非聴きたいと即座にお願いした。先生の弾くショパンの3番は特別ですから、この機会を逃したくありません。当日私は浜松に着くなり、ホテルに鞆を放り込むと直ぐ会場に向かった。

ホールの入口で係りに名前を告げると、中に案内され、空席が2つあるうちの奥の席にどうぞと云う。薄暗い会場だったが、見ると私の右隣にはフランスのセシル・ウセー女史が座している。彼女は有名なピアニストで、私より1つ年下だが、何時も若々しくエレガントでお洒落である。以前はレコード店に行くと彼女が弾いたLPレコードが何種類も並んでいたものだ。然し手を故障してから演奏を辞め、こうした審査員としてあちこちで活動をしている。私が彼女と話していると、私の左隣の空席に花束を抱えた年増の女性がドカーンと重いお尻を沈めた。私は遠慮がちに重いお尻の主をちらっと横目で見たら、この会の運営委員長と云った役割の中村絃子女史だった。私はヴィルサラゼ先生に呼ばれ彼女のショパンを聴きに来たのに、図らずも美女ウセー先生とマドンナ中村絃子先生の間に座ることになった。

ヴィルサラゼ先生は、ショパンのロ短調ソナタを弾いた。ホール中が音ひとつ立てずに彼女の演奏に聴き入っている。今、世界で彼女ほどこのソナタを弾いて、聴く者の心を打つ人は他に居るだろうか、という事を居並ぶ諸先生たちも充分知っている。この曲はショパンの中で一番の難曲だろう。演奏が終わると、大拍手となったが、ひと際大声で拍手し叫んでいる一団がいる。コンクールで競うために来ている外国からの若いピアニストたちで、感激の表現がまるで嵐か雷のように激しい。何につけ控えめで大人しい日本人とはこう言う処でもはっきり違うなあと感心する。見ると隣席のマドンナは舞台上に上がり、先ほどの花束を先生に渡している。

その晩、私はホテルの最上階にあるレストランで、ヴィルサラゼ先生と遅い夕食を共にした。

調律の事、拍手のこと

前の号で書いた通り、私は時々お気に入りの演奏家をお願いしてコンサートを起ち上げますが、自分で企画したり、運営したり、聴いたりして最後に「打ち上げ」をやり、全て終わってほっとす

る迄が何とも楽しくて苦しい一連の作業だ。

日本の殆どすべてのホールは世界最高のピアノ、スタインウェイのフルコンサートを備えている。全国で数千台があるだろう。日本が金持ちだった3-40年前から、スタインウェイの輸入が急増した。地方でもホールの建設が盛んで、お金をかけた音響設計も素晴らしく、その為にスタインウェイを購入するという事が流行った。

さて、私が企画するコンサートでの楽しみは、当日午後1時早々に会場を開けてもらってから、たっぷり1時間、一人で名器スタインウェイと遊ぶことです。これは至福の時であります。その後で、実際は調律しなくても充分な状態であったとしても、私は2時に調律士に来てもらい、2時間掛けてしっかりと調律してもらいます。スタイン

ウェイ・ジャパン社には40人ほどのお抱え調律士がいますが、その中から国立音大の篠井先生に紹介頂いた技師に毎回調律をお願いするので、先方も心得ており私は安心していられます。

最後に、日本のコンサートですが、総じて曲が終わった時の拍手が控目です。拍手が遠慮がちだと演奏者の士気が上がらず、最高の演奏を期待できません。その逆に盛大な拍手で演奏者を迎えると、演奏者は無意識のうちに士気が高まり、最高の状態で演奏を続けられるのです。皆さん、チケットに高いお金を払ったら、演奏者に向けて精いっぱい大きな拍手、激励を送ろうではありませんか。

(終わり)

《続々》イギリス徒然

柴 田 隆

I) 酒にだらしないイギリス人

I-1) 酔っぱらいには明日がある

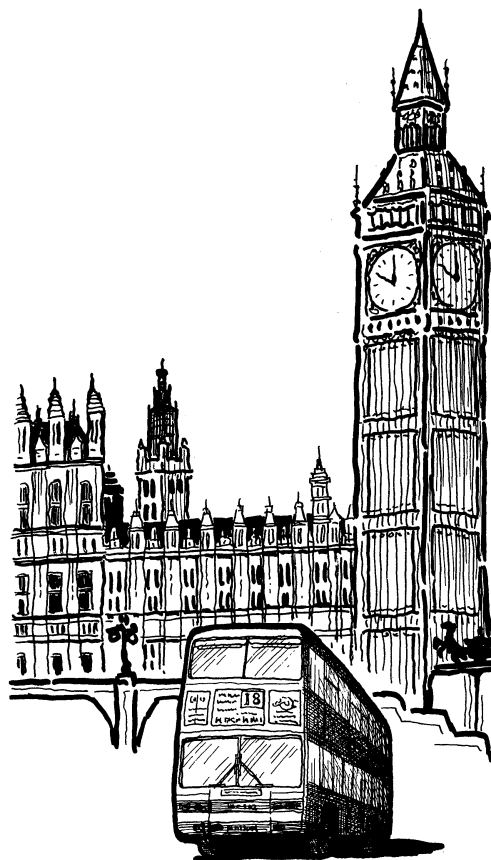
イギリス人は酒が大好きである。と言うより酒にだらしないと言った方がぴったりかも知れない。

昼食時、事務所の近くのイタリアメシ屋で合席となった、銀行に勤める若いドイツ人が“イギリス人の同僚が、昼食にビールを3～4パイント(1パイントは568ml, 日本の大瓶と中瓶の中間)飲んでいる。信じられない。”と驚いていた。

天気の良い日の昼食時、オフィス街のパブの外でジョッキーを持って談笑する勤め人風の人達をよく見かけたが、そんなに昼間から沢山飲んでいる人がいるとは想像もしていなかった。

欧米人は誕生日を非常に大切に使う。イギリス人も同様である。一つ年をとるのが、何故そんなに目出度いのかと思うが、習慣の違いで致し方がない。

事務所でも、“今日はジャネットの誕生日”と連絡が廻ると、その昼食時、近くのパブかワインバーに出かけることになる。主人公のジャネットが一



足先に行って、ワイン数本と軽食（サンドイッチ等）を準備する。

最初に準備されたワインと食事が無くなると、参加者が補給していくことになる。お開きとなつて、空びんを数えると、一人一本以上飲んでいるのが何時ものことだった。

とにかくにもイギリス人はお酒には目がない。第二次大戦中首相だったウインストン・チャーチルは毒舌で有名だが、この人も酒好きで、一杯きこしめして議院に登院することが多かったようだ。

ある日、“ウインストン、あなたは酔っ払っている。”と野党の女性議員のベッシー・ブラドックにチャーチルは噛み付かれた。“ベッシー、あんたはブスだ。明日になつてもブスは治らないが、明日には私の酔いは醒めている。”とチャーチルは言い返したそうである。

ここでブラドック女史の容貌が気になった。もし彼女が美人だと、これは見事なユーモアある切り返しだが、不美人だった場合、毒舌を通り越して喧嘩を売っていることになる。どちらだったのだろう。

いずれにしろ、“酔っ払いには明日がある”とは勇気付けられる言葉である。

I-2) 第1次大戦：敵はドイツとアルコール

イギリス人の酒好きは今に始つたことではない。伝統がある。

アメリカの物理学者で政治家のベンジャミン・フランクリンは18世紀の人であるが、若いころ印刷工としてロンドンで働いていた。同僚のイギリス人の印刷工達はビールは体に良いとして、朝

食前に1ポイント、朝食時に1ポイント、朝食と昼食の間に1ポイント、昼食時に1ポイント、午後6時に1ポイント、終業時に1ポイント飲んでいたら、フランクリン自伝に書いている。これではビールを飲む為に働いているようなものだ。

そして20世紀初頭の大1次世界大戦では、陸軍大臣キッチナー卿が三軍の将兵に節酒を呼びかけ、当時のロイド・ジョージ首相が“我々の敵はドイツと飲酒だ”と嘆くほど、前線の将兵も銃後の国民もが酒びたりだったようである。

前線の塹壕にいる兵士がビールの補給車の到着に両手を挙げて喜んでいる風刺マンガが当時描かれている。

そこで戦時立法として酒の販売時間を規制する法律が出来た。この結果、パブの営業時間は地域によって違うが、11～14時、17時半～23時が一般的になった。

この戦時立法で効果が上がったので、戦争が終わってから1921年に正式に立法化された。その後、観光客の評判が悪いとのことで、1988年に廃止される迄続いた。

ゴルフ場でも、ワンラウンドして（日本と違って18ホールを通しでプレイする。）上がつてきても、販売禁止時間だとビールは飲めない。但し、酒の販売は禁止されているが、飲むのは禁止されていない。コンペの時には幹事がスタート前に、瓶ビールをしかるべき数量買い込んでおき、持込ということで、なんとかプレイ後の喉の渇きを癒していた。

イギリスはドイツと戦っていたと思っていたのに、飲酒とも戦っていたとは・・・・・・。





「Jobsの本」と「Jobの本」

浜 地 道 雄

「iSteve: The Book of Jobs」。昨年10月に亡くなったアップル社の創業CEOだったSteve Jobsの伝記の予稿タイトル*にハタと膝を打った。「The Book of Job（'s'無し）」、即ち聖書の「ヨブ記」との見事なpun語呂合わせだ。（*実際に発刊されたタイトルはなぜか単純に「Steve Jobs」となっている）

このタイトルはiPadが発表された2010年1月の英エコノミスト誌の表紙にもあり、石版（lithography/tablet）ならぬタブレット型iPadを持ったSteveを聖人風に描いた表紙に感心したものだ。iPadはeBOOK（電子本）のプラットフォームだからまさに「ジョブスの本」だ。

ビジネスで宗教（や政治）の話はタブーとされてるが、しかし、多くのパートナーが「キリスト教、ユダヤ教、イスラム教」という同根の宗教・文化に属するとあれば、ゲーテが「ファウスト」を発想し、ドストエフスキーが「カラマゾフの兄弟」を構想したというこの「ヨブ記」を知識として心得ておく必要があろう。

「ヨブ記」はキリスト教旧約聖書（ヘブライ語）にあり、神の裁きと苦難に関する深遠なテーマだ。ユダヤ教では「諸書」の範疇の三番目に数えられる。

主人公ヨブは信仰深いOriental（1章3節）であり、イスラム教の聖クルアーンではアイユーブと言う名で出ている。ここでも財産を失い、妻以外の家族は去り、病気になったが、試練に耐え、アッラー（神）信仰心を捨てなかったゆえに、家族を二倍にされたと記されている。

サタンは神にこう言う。Is it for nothing that Job has feared God?

「ヨブが利益もないのに神を敬うでしょうか」（1章9節）。

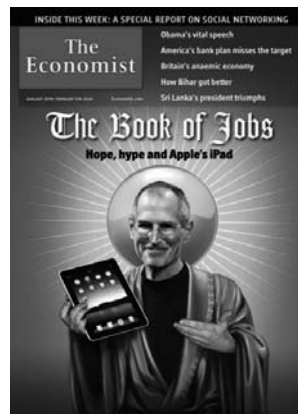


神はヨブを信頼しており、サタンの指摘を受け入れて財産を奪い、ひどい皮膚病に冒させ、試練を課す。

ヨブの妻まで神を呪って死ぬ方がましだと主張するが、ヨブはこう答えて退ける。

Shall we accept merely what is good from the God, and not accept also what is bad?

（2章10節）「神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただくのではないか」



愛社精神や忠誠心を試されるというのは今風でないが、仕事もビジネスも、いつも順風満帆とは限らない。苦境に陥り、家計にまで響き、奥方が文句を言った時に、こう言えるだろうか？

さて翻って、スティーブ・ジョブズの伝記。第一章Childhood、僅か6ページの記述は胸を打つヒューマン・ドラマだ。Abandoned and Chosen（捨てられて、拾われた）という見出しはヨブ記の「God has given, and God has taken away、主は与え、主は奪う」（1章21節）と一脈通じる。

次の副見出しがThe adoption（養子）だ。シリアからの留学生アブドゥルファターとアメリカ娘ジョアンはともにウイスコンシンの大大学院生。二人は恋をしてSteveを身ごもったのだが、イスラム教徒との結婚を娘の父は認めなかった。そのため誕生以前から、養子にだすことに決められており、結果Steveはジョブス夫婦に引き取られることになった。このあたりがSteveの独特の死生観に影を落としているのだろう。「ヨブ」が紀元前15・6世紀、シリアのダマスカス生まれというのも何だか因縁じみている。

ビジネスマンにとって、Taskは辛いし、Occupationは時間を食う。しかし、Vocationは天職であり、Callingも神の声（「あなたにとってCallingは何か？」）だから、仕事というのはJobが語るように深遠な営みだ。

（社）日本在外企業協会「グローバル経営」より転載・加筆

書評

「池上彰の宗教がわかれば世界が見える」池上 彰 著 文春新書

澁 谷 義

仏教、キリスト教、イスラム教の3大宗教の全てを解説している。更に神道、ユダヤ教まで、7人の賢人と著者が話しあい読み解いている。著者は元NHK報道記者で、退職後フリージャーナリストとして多方面で活躍。「世界を変えた10冊の本」もベストセラーになり、私も昨年末に読後感をまとめてみた。

以下、本書の要点と読後感をまとめてみたい。

- 1) 日本人の宗教感：日本人なりの宗教感、あるいは超自然的なものに対する畏れのような宗教意識を、しっかり持っている。宗教に対して排他的でなく、広く神仏を信じるおおらかさがあると私も思う。輪廻転生（りんねてんしょう）という思想は、バラモン教からヒンドウ教や仏教に伝えられた。

- 2) 民主主義が原理主義を生む：イスラム教の動きから世界を見ると、民主主義のジレンマが見えてくる。民主的な選挙をすると、原理主義勢力が圧倒的な力をとる。



- 3) ヒンドウ教とバラモン教：インド人8割以上がヒンドウ教を信じており、古代インドのバラモン教から生まれた。釈迦も生まれた時はバラモン教徒であった。

- 4) 「葬式は要らない」の著者・島田裕巳との対談：著者は戒名料の不当な高さを問題にしている。死後になぜ名前を変えるのか。戒名なんて不要という。宗教法人は税制で優遇され過ぎて



いる。仏教が伝来して飛鳥時代からずっと神仏習合の文化であった。日本人は無宗教と後ろめたく思う必要はない。日本は、ある意味では世界で最も宗教的に進んだ国になっている。宗教は、人間を異常な行動に走らせる原動力にもなる。オウム真理教にエリートも狂奔した。

- 5) 浄土真宗本願寺派の如来寺の住職の釈徹宗と

の対談：仏教には、この世界をつくった神様の世界的創造神話はない。仏教は実践主義的な宗教である。輪廻から脱出した仏陀は、ブッダ・ワールドを成立、これを身土不二（しんどふじ）と言う。悟りを求めて修業している人は菩薩の道を歩んでいると言える。インドからタイやミャンマーに伝わった上座部仏教（小乗仏教）は、出家するのが信仰の本来。日本の大乘仏教は、出家しないで在家でもよい。創価学会は日蓮正宗の信徒団体が発展した。

- 6) 臨済宗神宮寺の高橋卓志住職との対談：お坊さんの世襲が普通になり、寺が家業化している。葬式は葬儀社に丸投げで、高額のお布施を暗に要求、堕落している。葬式は要らない、直葬が増えている。寺が持つ潜在能力を発見し、地域社会にもっと貢献できる。

- 7) 宗教学者の、山形孝夫との対談：山形氏はクリスチャンである。イエスは人権派の弁護士で、すぐれた精神科医のような存在であった。聖霊の力により処女マリアより神の子イエスが生まれたという解釈になる。



- 8) 国学院大学前学長の安蘇谷正彦との対談：神道には、お祭り、神社、神道古典、神道思想の四つの基本柱がある。稲作を始めた日本人が五穀豊穡を祈り、感謝することから始まった。



- 9) 東京外国語大学教授の飯塚正人との対談：西暦570年にメッカで生まれたムハンマドが、40歳の頃、洞窟で突然神からの言葉を聞き、人々に伝え始めた。アッラーの啓示を書き留めた本が「コーラン」で、イスラム教の聖典である。断食はもともとユダヤ教の習慣であった。コーランは一夫多妻を認めている。イスラム教徒の9割がスンニ派で、イラン、イラクに多いのがシーア派である。1973年の第四次中東戦争で、エジプトのサダト大統領がユダヤ教国のイスラエルとの戦いをジハードと言いつつ出した。イスラム教徒は増えていて15億人以上もいる。

10) 解剖学者の養老孟司との対談：無宗教の無は、諸行無常の無である。空とも言える。般若心経に無や空が一割も使われている。日本人には、仏教的な無が刷り込まれている。宗教と科学は表裏一体で、住み分けている。人間は日々変化している。その先に死が来る。それが自然の理で、死んだらオシメエ(終わり)と思えば楽になる。般若心経は、私もCDを聴き、覚えようと

したが、覚え切れなかった。でも、内容をよく理解すると味わい深い。男僧と尼僧の斉唱はリズムカルでうっとりする。

上記、本書の要点をまとめてみた。世界の宗教の有様が少し分った。

以 上

書評

「高血圧は薬で下げるな！」 浜 六郎 著 角川書店

澁 谷 義

著者は大阪大学医学部卒、NPO法人医薬ビジランスセンター代表。医薬品の安全な使用のための調査研究と情報収集・広報活動に取り組んでいる。

終章「降圧剤をやめる方法」を最初に紹介してみたい。血圧の目安は、新基準130～85では、まったく低すぎる。旧来の基準値で160～90でも、まだ低すぎる。

71歳以上の高齢者なら、降圧剤の副作用を考えると、180～100でも降圧剤は必要ないでしょう。

大切なのは、血圧が高くなる原因を見つけることです。深呼吸、適度な運動、よく睡眠をとり、塩分を控えめにすることが血圧を下げる。

それほど高齢でなくても、降圧剤で無理に血圧を下げることもありません。無理な食事制限、とくに粗食は百害あって一利なしです。

まず薬ではなく、生活習慣の改善に取り組みましょう。ストレスと睡眠不足の解消、BMIで24～26程度になるよう体重を落とす。バランスのよい栄養をとるように心がける。そうすれば、自然に適正範囲に血圧と体重は下がるはずです。

ゆったりとリラックスして血圧を測る習慣をつけましょう。降圧剤を服用している人は時間をかけて血圧を測り降圧剤を減らしましょう。血圧が上がる原因を取り除きながら、やがて完全に降圧剤をなくすことがいちばんよい方法です。

以上、結論から本書を紹介した。私も血圧を気にしている。夏場は120から60位と低いが、寒くなるとかなり上がってくる。上が140～165、下は70～85位になる。一昨年冬に降圧剤を処方して

もらったが、冷蔵庫に入れたまま服用していない。

毎日ダンスや散歩して腹八分目の食事ですしでも減量すれば、血圧も少しは下がる。内外併せて単身赴任12年に及んだが、ゴルフ、テニス、登山などに注力して血糖値や中性脂肪も何とか標準値内に抑えてきた。少々気になるのは、LDLコレステロールとガンマー GTPの数値が少し標準よりオーバーしていることである。酒は百薬の長とも言う。毎日飲酒しても飲酒量は少ない。食事後は飲酒しない。

現在高血圧症という病気の患者にされてしまう人は5千万人にもなるとは驚きである。高血圧の基準改定が膨大な患者を生んでいる。降圧剤を長期に使う害が、解明されていない。気楽で安全な飲み薬ではない。



WHOのガイドライン改定作業の裏で糸をひいていたのは、多国籍企業の製薬会社から資金提供もあるとは驚きである。

高齢者は、全身に栄養を行き渡らせるために、ある程度高めになるのは自然なことである。降圧剤使用によるガンによる死亡の危険度1.3倍になる。

以上、本書の要点を紹介してみた。

ニチメン大阪社友会・24年・第6回総会懇親会報告

林 靖

第6回ニチメン大阪社友会総会・懇親会を平成24年9月6日（木）に、藤田観光・太閤園において開催しました。まだまだ残暑厳しい中ではありましたが、161名の皆さんがお元気に参加されました。当初178名の参加予定でしたが、当日早朝に北陸本線の事故の影響で10数人の人が到着できず、残念でした。

太閤園は昔懐かしい思い出の会場であることに加えて、交通至便であり、すっかり定着したようです。総会会場は大ホールに200名の椅子席をセットした設営とし、続いて隣接するダイヤモンドルームに場所を移して懇親会を行いました。

午前11時からの受け付け開始とともに皆様一斉にお元気に到着され、11時30分から定刻通りほぼ全員参加で総会が始まりました。関岡世話人代表が総合司会と議事進行を担当しました。冒頭、物故者に対する黙祷を行いました。



まず田淵会長挨拶では大阪社友会の順調な発展経過を報告され、積極的に取り組んでいるイベント事業にも詳しく触れましたが、さらに東北被災地への義捐金募金を提案されました。今後新年互礼会、その他絵画、写真展等イベント開催時にも継続して募金箱を設け、25年6月末まで続けていくこととしました。

続いて23年度事業報告、会計報告をそれぞれ関岡大吉世話人代表、信正武雄副会長から報告し、24年度事業計画、会計予算と合わせて、満場一致で決議しました。

総会審議終了の後、続いて、双日を代表してご参加いただいた茂木良夫執行役員代表取締役専務から丁寧なご挨拶と双日株式会社の事業計画について力強いご報告をいただきました。さらに、今期で退任されました元会長土橋昭夫最高顧問からご挨拶をいただきました。長年にわたる激戦を全うされた功績に対して満場の拍手で労いました。

続いて懇親会に移り、高木啓志郎世話人が司会を担当しました。乾杯の挨拶と音頭は長老を代表して横田穰治さんをお願いしました。86歳のご高齢にもかかわらず、いまだにボランティア事業にご活躍の内容についてご紹介をされたのち、一同高らかに乾杯しました。



会場にはバイキングスタイルの料理テーブルを囲んで20台の丸テーブルを配置しました。又、ご高齢者対応の特別テーブルを設け、お座りを頂くよう配慮しました。皆さま大変お元気で、予想通り旺盛な食欲を発揮されました。今年は、特に役員会で検討を重ねたこともあってか、和洋取り混ぜたバラエティーに富んだ料理メニューとボリュームについて大変好評であったように思います。酒類も日本酒、ビール、焼酎、ウィスキーの飲み放題が好評で、適度に無理なく楽しんでいただきました。久しぶりに参加された懐かしい方々の御顔があちこちに見られ、大変賑やかな対話が弾んでいました。あっという間の2時間でした。中締めは林喜久雄世話人がユーモラスにお話しされ、今年も楽しいお開きとなりました。新年互礼会は25年1月10日（木）に、引き続いて太閤園で開催することをご案内して散会いたしました。

第7回ニチメン機友会報告

五 月 女 穰

毎年恒例のニチメン機友会が、10月20日に八重洲富士屋ホテルにて開催されました。今年は第7回目で、旧ニチメン電子電機本部が当番幹事の役割を担いました。

今年も昨年同様約400名の方々に案内状を発送した結果、最終的に71名の方々にご出席頂き、心からお礼を申し上げます。所謂ドタキャンも最小限に留まり、幹事一同安堵致しました。

会は、先ず11時30分からの集合写真撮影で始まりました。今年は幹事が勝手に出席者の年齢を判断し、80歳代、70歳代、50～60歳代の年齢別グループに分けて写真撮影を行いました。

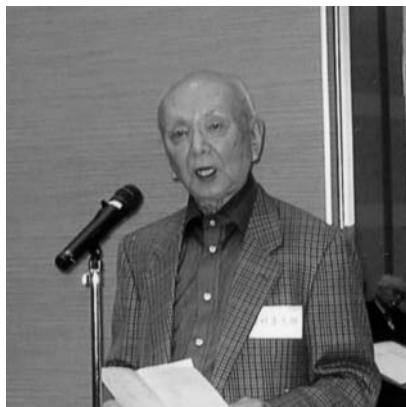
集合時間にぎりぎり間に合った方は、最後にまとめて撮ったので、多少年齢のずれが生じており、又撮影に漏れた方も5名おられますがご容赦願います。幸いなことに「誰々と一緒に写真に写りたい。」「誰々と一緒に写真は嫌だ。」「俺は、この年代ではない。もっと若いのだ〜。」等々のクレームは殆どありませんでした。出席者は、圧倒的に70歳代が多く、二つのグループに分けましたが、50～60歳代も昨年の約倍の19名の方に出席願いました。

今迄圧倒的に戦前、戦中派によって占められていたのが、今回初めて出席者の約四分の一が戦後生まれになり、会の若返りに多少なりとも貢献しました。

定刻12時に、今回の総合司会者である池永浩当番幹事の進行で会が始まり、先ず昨年10月の機友会以降に鬼籍に入られた機械関係者5名に対し黙祷を捧げご冥福をお祈り致しました。

その後、朝倉代表幹事による当番幹事を代表しての挨拶及び当番幹事（星合良彦、池永浩、保科孝、五月女穰）の紹介が行われ、朝倉代表幹事からは、東西の交流に努めた結果、関西から10名の方に参加頂いた、若年層の参加を働きかけたが道半ばであるとの説明がありました。

続いて石澤会長のご挨拶があり、本年度は出席者の窓口が広がった、これから国の内外を問わず機械関係者には出来るだけ出席してもらいたい、又昨年に引続き日本の政治にも触れられ、政府は借金を減らすよう努力をせよ、政治家はもっと頭を使え、と内容の濃いお話でした。



野村喜久雄さん

昨年同様長老を代表して野村さんにご挨拶頂きました。1947年に入社以来、単身で生活環境の厳しい海外各地に駐在したときの思い出話、一転話題を変えてご自身の経験に基づいての医薬品と健康薬品との相性の問題など、これ又含蓄のあるお話でした。

その後丸山さんより、同じ機械部門で苦楽を共にした皆さんのご健勝を祈念するとのご発声による乾杯と続きました。

しばし歓談の後、大阪からの出席者を代表して辻井さんにご挨拶頂きました。何時もの軽妙洒脱の話術には心が和みます。今回大阪からの10名以外に、遠路遥々海外から米国西海岸カリフォルニア州シリコンバレー在住の山本さんにご出席頂きました。

又、機械部門以外からも、三宅さん、牧さん、安武さん、吉水さんの5名にご出席頂き感謝しております。昨年同様ニチメン・マンドリン・クラブ（通称与儀バンド）には、開会時のBGMに始まり、閉会迄演奏を続けて頂き、会を盛り上げるのに大活躍をして頂きました。

上條前会長による「リラの花咲く港町」の独唱は、失礼ながら90歳の年齢を感じさせない張りのある美声で、聴く者をうっとりさせ、続いて昨年に引き続き「青春時代」を有志で合唱し、昔懐かしい良き青春時代に思いを馳せました。

会も終わりに近づき、倉又常任幹事による中締めを行い、その後来年の当番幹事佐藤鐵雄さんにご挨拶を頂き、定刻午後2時に会は無事終了致しました。

今回134名の方から欠席の連絡を受けましたが、欠席理由のうち、「体調不良」「手術後の経過が思わしくない」「ドクターストップ」等健康に関するもののがかなり目につきました。

機友会は、来年も10月に開催予定しております。皆さん揃って「金環日食」にならぬよう健康に十分留意願い来年も引き続きご出席下さい。

電子電機本部は、今回初めての当番幹事で、至らぬ点が多々あったと思いますが、ご容赦頂ければ幸甚です。

最後になりますが、今回高木亨一さんを始めとする常任幹事の皆さんには、名簿作成、写真撮影、受付等各方面で大変お世話になり有難うございました。



当日受付を手伝っていただいた方々。左から
風間理絵さん、吉田順子さん、小堀裕子さん、増川恵子さん

2012年10月20日開催 第7回機友会出席者 (五十音順敬称略)

朝 倉 重 道	木 寺 厚 二	高 橋 要 司	藤 野 泰 三	吉 川 秀 夫
池 永 浩	日下部 百 也	辻 井 準 一	古 家 章	吉 水 稔
石 澤 謙 一	倉 又 則 夫	豊間根 政 行	星 合 良 彦	立 古 健 策
泉 伸 夫	米 田 信 一	中 原 正 紀	保 科 孝	山 邑 陽 一
稲 冶 寿	越 野 量 路	中 村 静 人	牧 洋 生	
今 村 隆 夫	近 藤 善 行	中 村 吉 夫	松 尾 憲 一	松本(荒井)幸子
小 野 稔	五月女 穰	西 槇 憲 生	丸 山 修 作	石山(篠塚)幸子
大曾根 誠	佐 藤 鐵 雄	野 村 喜久雄	三 品 征三郎	高 田 秀 子
岡 村 宏	佐 藤 統 次	長谷川 洋	水 庫 博 夫	
数 森 正 彦	澤 田 太 郎	林 正 弘	溝 江 博 三	
上 條 達 雄	杉 本 佳 久	久 本 紘 一	三 宅 葉	
川 田 英 之	鈴 木 淳 一	広 内 卓 生	森 江 健 児	
川 西 勲	高 木 亨 一	廣 岡 幹 雄	安 武 国 章	
川 西 啓 三	高 瀬 善 男	広 本 昌 也	矢 吹 敦 司	

下記4名の方に当日受付を手伝って頂きました。有難うございました。

小堀裕子、増川恵子、吉田順子、風間理絵



第7回ニチメン機友会風景



ニチメン東京化工OB会 ＜第22回懇親会＞

栗 田 久 彌

去る10月19日(金)18時より日本橋交差点脇の「レストラン東洋」で、恒例のニチメン東京化工OB会を開催しました。

平成2年春に化工本部OB長老有志が創設した本会も、発足以来中断する事なく毎年継続して開催され今回で22回目を数えるに至りました。

往年の参加者は常時50～60人と盛會を極めて居ましたが、その後新規OBになられる方々の減少や鬼籍に入られた会員等も有って、最近の参加者数はやや通減の傾向にあり、本年度は昨年と同水準の33名の参加を得ての開催となりました。

島崎会長のご挨拶の中でもありました通り、新規参入会員の掘り起こしをして会員数の維持向上を計る必要がありますので、若手会員の支援を受けながら幹事が中心となって新規会員の獲得に努める事をこれからの重要課題としておりますので、当会に参加希望をされる方は必ずしも出身部門に捉われる事無く下記幹事に電話或いはeメールでご連絡下さい。大歓迎です。

とは言え、今年の懇親会の雰囲気も開宴直前から相変わらずの「ワイワイ、ガヤガヤ」熱気に満ちた雰囲気でしたが、開宴後は忽ちにして化工OB会独特の雰囲気で更に盛り上がり、お互いに侃々諤々旧交を温め合う有意義な一時に移り変わって行きました。

閉会予定時刻に至っても散会の雰囲気は全く見られず、レストラン側に時間延長の内諾を得た上で時間延長を行い、当初予定の40分以上もオーバーした20時40分頃になって、来年も10月第三金曜日(18日)今回と同じ「レストラン東洋」での開催を全員一致で確認した後、成見先輩の一本締め音頭で宴を締め無事終宴・散会しました。

「化工OBは何時迄経っても相変わらず元気浣刺」と言うのが幹事実感の一夜でした。

☆参加者名（アイウエオ順 敬称略）

青 木 政 和	阿 久 津佳子	浅 井 正 彦	浅 子 豊 治	足 立 宏
大 野 久 生	沖 田 隆 彦	小 平 愛一郎	勝 田 泰 司	栗 田 久 彌
近 藤 正 一	柴 田 実	島 崎 京 一	関 口 比左志	竹 内 可 能
竹 内 雄 一	玉 置 宣 宏	中 尾 弘 久	中 原 正 紀	滑 川 和 子
成 見 和 男	西 川 洋	西 村 照 男	林 悟	本 間 登志雄
前 嶋 美 和	水 野 英 幸	箕 作 武 彦	山 邑 陽 一	吉 海 秀 造
吉 木 健	吉 田 孝 生	和 田 順 一		

幹事連絡先

合成樹脂関係：吉 木 健

電 話： 03 - 3421 - 9497

E-mail： yoshiki@fb3.so-net.ne.jp

化学品関係： 栗 田 久 彌

電 話： 048 - 473 - 3339

E-mail： kurita138@jcom.home.ne.jp

第22回ニチメン東京化工OB会 懇親会風景



俳句の会「いろは句会」

宇 治 田 薫

I. 句会のその後：

今年もはや年の瀬を迎える。月毎に季節を追って句を詠んでいると、直ぐ一年の頁を繰る事になる。

太田昭主宰のご他界後、10カ月経過した。3月以来、いろは句会としては主宰のご恩にお報いし、数々の作品をテキストとすべく平成16年～23年にかけて「いろは句会」と「四季合同句会」に投句されたご自作の372句を収録する「太田あきら句集」を作成する事とした。会員一同、心をこめてアイデアを募り、熱心な協議を重ねて句集の作成に注力した

そして、秋のお彼岸のお供養に備えてご遺族と、併せて主宰された各句会の同好関係者に限り同句集を贈呈させて頂いた。

例により、前号以降の作品の中から各会員2句宛、下記にご披露致します。

I. 会員の発表句（アイウエオ順）：

薫風や明石の釘煮届く頃 (宇治田 薫)
八月や昭和は遠くなほ重し

ベストフォーならず球児の夏終る (太田 琢也)
復旧の道なほ遠し蕎麦の花

炎天下道路工夫のお辞儀かな (久保田悦子)
紺青の空押し上ぐる運動会

雲間より日食の朝麦の秋 (三枝 一希)
緑陰や庭師雑魚寝の昼下がり

畦焼の煙を潜り列車来る (笹原 弘)
波膨れ浜に寄り来る若芽かな

花菖蒲池ひろびろと風渡る (下川 泰子)
流鏝馬に遊ぶ視線や秋祭り

施設にも笑ひ声あり梅雨晴間 (須藤 忠昭)
昼食はお重を囲み運動会

百年の大樹の幹に花一輪 (塚本 幸雄)
かすかなる風選りわくる糸とんぼ

浴衣着のうなじ暖簾をくぐりけり (福島 有恒)
蟬螂が先客となる駅の椅子

調律の鍵盤踊る梅雨晴間 (藤野 徳子)
草の花名を問ひて又問ひ直す

下校時を告ぐる放送合歓の花 (若月 義和)
二胡の音の幽けき闇の夜寒かな

以 上

* 第31回ニチメン湘南 GOURMET 会開催 *

新 崎 盛 晨

2012年11月30日、横浜『崎陽軒』にて、本年度の掉尾を飾るグルメ会を開催しました。
なんと正確に記録を調べたら、今回が第31回になりました。
年2回開催が原則ですが、ここ二年は年1回となっている。
かれこれ15年余続いていることになる。

故安藤幸男、故岩田昭二さんたちで立ち上げた会です。いまは大阪に移住された野村喜久雄さんも会の重鎮として未だにご参加くださいます。

この会の特徴は、OBが各部門に拡がっている事です。
機械部門のみならず、食糧、財務、経理、監査、鉄鋼、石油のOBが居られることです。

毎回、往時を偲び懐旧談をするだけでなく、UP-TO-DATEな時局問題にも話題は及び、まさに談論風発の会となります。

但し、皆寄る年波で病気の話が出るのは已むを得ないことです。

尚、当日は、12月1日で満90歳を迎えられる北村俊夫さんのご長寿を皆で祝いました。

グルメ会よ永遠なれば自然の哲理に悖るものの、出来るだけ長く続けようと再会を約してお開きとなりました。



《敬称略》

前列 左から；丸山泰三、高瀬善男、野村喜久雄、北村俊夫、杉本佳久

後列 左より；宮本正博、長谷川博、北川敬、藤野泰三、笠井公雄、新崎盛晨

蜷川親秀さんを追悼する

坂 本 皓



蜷川親秀氏略歴

昭和22年（1947）東京商大専門部（現一橋大）卒
昭和22年（1947）日綿実業（ニチメン・現双日）入社 食糧部
昭和30年（1955）シドニー駐在
昭和32年（1957）帰国後ニチメン食糧部へ、麦類課課長、副部長歴任
昭和45年（1970）ヤマザキナビスコ（総務部長）出向
昭和46年（1971）ニチメン食糧総括部 部長
昭和47年（1972）マニラ支店 支店長
昭和52年（1977）ニチメン電機産機部 部長
昭和56年（1981）ニチメン取締役 業務本部 本部長
昭和61年（1986）ニチメン取締役退任
昭和61年（1986）ニチパック（株）社長
平成4年（1992）ニチパック会長退任
平成24年（2012）7月27日没 享年85才

食糧部在籍中合弁事業、阪神サイロ、ヤマザキナビスコ両社の設立に中心的な役割を果たされた。

生前の様子

4年前に胆管ガンの手術を受けて一旦小康を得られたが、そのすぐ後にすい臓にガンが再発、副作用の強い抗がん剤治療は受けずに自然体での生活を送られていた。昨年中頃迄はお好きなゴルフを熱心にやり、また麻雀、カラオケも楽しんでおられた。今年4月急性肺炎を患い一時入院をされたが、その後はご自宅で療養を続けておられた。また亡くなる少し前までメールで明るく応答されていた。7月27日自宅にてご逝去。

追悼の辞

蜷川さん、逝かれてから早や四ヶ月経ちましたが、脳裏にある貴方の笑顔が目の前に浮かび、亡くなられた実感がなかなか得られずに居ります。ともあれ長い闘病生活、本当にご苦労様でした。3年前にすい臓にガンが再発した際、これからは自分のやりたいことを目一杯やって過ごしたいと云われ、その言葉通り残された日々を最後まで全力で駆け抜けられました。悔いを残さぬよう早くから周到なご準備をされ、貴方らしく人生を全うされたことに心からの敬意を表します。

わたしが貴方のもとで働いたのは、貴方の麦類課課長時代、昭和38年からわたしがポートランド

に赴任した昭和44年までの6年間でした。もう50年近い昔のことですが、当時のニチメンの輸入食糧は、業界最大手の地位にあり、業務面ではその課長に強いリーダーシップが求められていました。

アメリカの港湾労働者の長期に亘るストライキやアメリカ小麦の深刻な品質問題（低アミロ）によって輸入が中断され、日本への食糧の安定供給が脅かされるような重大事件が相次いで起こったのもこの頃でした。日米両政府や多数の利害関係者が絡むこれらの難問題に対して、貴方が持ち前のリーダーシップと行動力をもって、その解決に奔走されたことを思い出します。また当時政府の管理下にあった小麦の輸入が、近い将来自由化されるだろうとの大方の見方から、商社や製粉業界がその対応に走り出した時期でもありました。ニチメンも貴方が中心となり、小麦粉の内販や輸出の拡大、物流拠点としての港頭の大型サイロの建設など自由化対策の検討を進めており、その一環として具体化されたのが、阪神サイロやヤマザキナビスコの合弁事業でした。これらのプロジェクト推進に当たっての、貴方のプロモーターとしてまたコーディネーターとしてのご活躍は本当に目覚ましいものがありました。

このようにニチメンの食糧部門が活気に満ち、また輝いていた時代に貴方のもとで仕事をし、ま

たご指導を得られたこと本当に幸せでした。

貴方が仕事の上で大変な才覚の持ち主であり、また非常に個性的なお人柄であることは誰もが認めるところです。ただ無類の仕切り屋さんで、何ごととも自分流に行き届いたアレンジをしないと気がすまない癖があり、気がまわらないわたしなど、よくあたふたしたものです。また行動原理が何事に対しても先読み先駆けで、愚図愚図していると置き去りにされるので、追いかけるのがとても大変でした。もっともこのようなキャラクターがあったらこそ、事が進み、事が成ったのかも知れません。後年貴方自身、反省の意味もこめて“ボクの悪いクセ”とか“オレ流”とか述懐されていましたが、人生の最終章でも”オレ流”を通されたようですね。

亡くなる直前の7月7日、メールで予告いただいた、如水会報（一橋同窓会誌）10月号掲載のご遺稿「マニラ日本人学校の校歌」拝読させていただきました。掲載が予定より遅れた為、生前ご自身でご覧になれなかったこと大変残念でしたが、貴方がマニラ支店長当時、マニラ日本人会副会長兼日本人学校理事として日本人学校の新校舎建設にご尽力されたこと、校歌制定に当たり、多数の応募曲の中から貴方自身の作詞・作曲になる作品が

高学年生徒達の圧倒的支持を得て校友歌に選定され、今なお歌い継がれていることを紹介されておられました。本当に誇らしい感動的なエピソードです。貴方は文や詩づくりがお好きで、よくあちこちに投稿されており、その著作を度々拝見しましたが、楽譜を書き作曲まで手がけておられたことを初めて知り、その多彩な才能に改めて驚かされました。どこに行かれても必ず何事かを成し、存在感を示し、その足跡を残しておられることに、唯々感服するばかりです。余計なことをひと言つけ加えると、北辰一刀流の開祖千葉周作の言葉に「われ足跡を残さず」というのがあります。非才のわたしはこの流儀でいくしか無いようです。

貴方と鈴木明さんが発起人となってつくられたニチメン食料OB会も大変さびしくなりますが、われわれ後輩達の貴重な交流の場として繋いでゆきたいと思っております。どうぞお見守り下さい。

先輩・後輩の域を超えた友として深く長いお付き合いをいただき本当に有り難うございました。心からご冥福をお祈りします。

深い敬愛の念を込めて、 合掌。

（追記） 蜷川さん作詞作曲のマニラ日本人学校交友歌はyahooで“マニラ日本人学校校歌”で検索すると、you tube で子供達の合唱の音声が聞けます。



堀之内敬さんの思い出

長 谷 川 洋

昭和33年4月1日、大阪は中之島、日綿実業(株)大阪本社・会議室で、入社式が執り行われた。

その際、忘れもしない！ 堀さん、こと堀之内敬さんは新入社員を代表して前に進み出て、答辞を述べた。

「粉骨碎身会社の為に・・・」と言ったのを、55年経った今も、覚えている。

神戸大経営学部を出た堀さん、爾来、会社の為に将に粉骨碎身の所為か、最晩年は、病を得て足腰に不具合が生じてお気の毒であった。

その年の新入社員は、北海道から九州に至るまで、人材は雲の如く集まった。

出身大学も、旺文社の受験誌じゃないけれど、小樽商大から、福島大、東大、一橋大、東京外大、東京農工大、慶応大、横浜国大、横浜市大、名古屋工大、京大、滋賀大、和歌大、大阪大、大阪市大、大阪外語大、大阪府立大、神戸大、神戸商科大、神戸市外大、関西学院大、同志社大、甲南大、山口大、長崎大と日本列島を縦断した。

その中で、大阪本社勤務の中で、出来たばかり

の日綿宝塚逆瀬川独身寮に入寮したのが堀之内、大谷毅丈夫、埴生栄勇、故因幡忠顕、花崎俊雄、神田剛太郎（久大）、菊澤淳、菊池省三、大場禎治、高橋正、小橋偉男の諸兄と長谷川である。

堀さんは、LION小坂俊吉部長のいた原毛部から会社生活をスタートした。

猛獣の下で仕事をして益々サラリーマンとして修行が出来たことでしょう。

後年、会社の中核、社長室で重要な任務についた時に大いに役立った筈です。

ニチメン保険センター社長時代には小生はしばしば訪問し、コーヒーのご馳走になった。

部下が重篤な病気にかかり仕事を已む無く離れた時も、仕事のことは心配せずに、治療に専念するようにと、優しい言葉もかけた。仕事に対する厳しさの中にも人情味のある上司だった。

堀さんは九州男児で若干頑固にして寡黙な慎重居士であったと思う。

(次ページへ続く)



〔2008年9月 ミニ33会の仲間たちと〕

前列向かって左に堀之内敬さん

その右へ：大谷毅丈夫、杉本佳久、阿賀信夫

後列左から：長谷川洋、埴生栄勇、鎌田亮三

軽佻浮薄な小生よりはるかに人間が上だった。

独身寮時代、冬は、よく昔ながらのドテラを着ていたのが思い出される。

彼の部屋で、ジョン・スチュアート・ミルの“On Liberty”を語ったのを未だに覚えている。

生前は全く知らなかったが、堀さんは、日本モータルト協会の正会員でケッヘル・ナンバーの数だけの限定会員だった由。

奥様を中之島フェスティバル・ホールの特等席にお連れしたこともあったとか。

同期の仲間切っつの音楽通の埴生兄も知らなかった。己のことを喧伝しない九州男児だった。

亡くなるまで病床でもCDで音楽をよく聴いていたそう。病室でお孫さんたちと撮った写真に見る堀さんの温顔が印象的だった。

また彼は、東京駅丸の内側ステーション・ホテルをお気に入りだったそう。

新装成った駅舎を観ることなく逝ったのは真に残念だったでしょう。

原毛時代だったか、堀さん初めての海外出張ということで、その頃、東京支社に移っていた小生

の席に挨拶に来たと言うので、人事外事課に聞く、既に会社を出て羽田空港に向かったと言う、そこで小生は急遽、モノレールに飛び乗って後を追った。空港で、もう税関に入る直前だったが“堀之内～！”と呼んだらこっちに戻ってきた。Bon Voyageを言うことが出来た。

堀さんが社長室の頃、小生は海外から一時帰国すると必ず会いに行った。

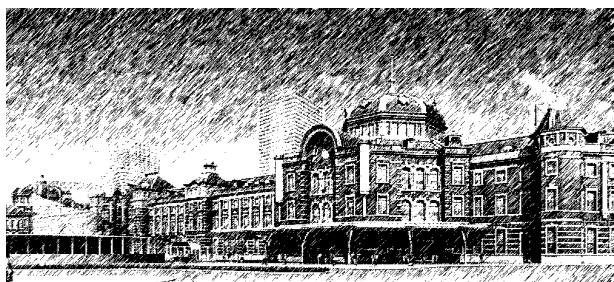
そうしたら社長室の部下たちが、“長谷川さんが、堀之内さんとお友達とは信じられない”と不思議がられた。人間のタイプがかなり違うかららしい。

人間同士のChemistryなんて、傍からは分からぬものです。

入院する3年前までは、Mini-33会と称して、大谷、埴生、杉本、阿賀、鎌田の諸兄と二ヶ月に一度は会食をして来た。

そんな時も いつもニコニコ笑って、穏やかに他人の話を聞いていた。

葬儀の際、弔辞でも述べましたが、あの世で“Mini33会”を開くのも、そう遠い将来ではないので待っているように。いまは足腰の痛みも失せて安らかにお眠り下さい。



追悼：小川宇士雄さんを偲んで

園 山 春 一



小川さんが黄泉に旅
発たれたと言う報は、
まだ夏の盛りの8月8
日の午前中にありまし
た。前々から体調を崩
されているとは聞いて
いましたが、大きな衝

撃を受け、その日は朝のジョギングも止め、暫しどうしてそんなに急いで逝ってしまったのですかと私の心の中の小川さんに何回も問いました。10年ほど前に会った時の会話を思い出します、「今は二人とも仕事を持っているがあと数年すれば悠々自適とはいかずとも晴耕雨読の時がやってくるから、その時に二人で若かりし頃、なじみ、親しみ、数々の思い出があるアフリカやヨーロッパを旅しよう」と約束したのに、この約束の実現が不可能となった今残念でなりません。

誰もが小川さんと言えば、背がスラリとしていて眉毛が下がり気味の笑い顔の優しい方を思い出され、そうした小川さんをご霊前に飾られた遺影を見て偲ばれた方も多かったと思います。小川さんと私の出会いは、1968年でした。その頃小川さんは鉄鋼原料の新進気鋭として活躍されておられました。当時の私にはまぶしく近づきたい先輩でしたが冒頭に述べたような笑顔で接していただき、それ以来会社での30年間、そして会社を離れてからの約15年間、公私にわたり薫陶とご指導を受けました。その間数々の思い出がありますが、まず二人の関係について触れご冥福を祈りたいと思います。

私の鉄鋼原料部の在籍期間は正味6年半でしたが、その前後のパリ駐在期間も原料の業務が中心であり、わたくしが鉄鋼原料にいた期間も小川さんがパリにおられ、20年近くのPitcher/catcherの関係にありました。ですから当然仕事上のやり取りをすることになるが、長年小川さんがサインを出し、必死で投げる役を務めたのが私でした。だが、この投手はわがままな、そして、コントロールの定まらぬ投手でした。その投手を我慢強く、

なだめすかして使いこなしてくれたのが小川さんでした。pitcherの良し悪しはcatcher次第とよく言われており、私たちが正にこの関係にあり、もし私が少しでも会社の役に立つことが出来たとしたらこうした小川さんのおかげです。

そうした関係の下、二人でよくアフリカに、特に、西アフリカのギニア、モーリタニア、セネガル、象牙海岸に出張しました。特に、ギニアへの出張には、満島、善野、納、永井達二、小田四郎さんなどのすでに鬼籍に入られた方々と同行したことも忘れがたい思い出ですが、今回は小川さんまで失いギニアで苦労を共にした戦友たちが次々といなくなりさびしい限りです。ギニア自体を語ることが本稿の目的でないので、ギニア事情は省かせていただきますが、西阿でもっとも生存条件や環境が厳しい国がギニアでしたが、小川さんは長期出張で1年と数十回に及ぶ出張をされ、我が国、わが社のために鉄鉱石という鉄を作るためには不可欠な原料を確保することに全知全能を傾けギニア政府から開発許可を他の日本の商社や欧米の製鉄会社に先駆け取得すべく戦っておられましたことを昨日のことのよう思い出します。また、モーリタニアのMIFERMA社より10年以上にわたる長期契約の調印に成功され、日本の高炉6社向けに遥かかなたの西アフリカより鉄鉱石を供することに貢献されました。この時の交渉は、遠距離且つ日本に全く知られていない国、山元からの購入ということで、日本の製鉄を安心させ購買を決断させる難しさはどうしても距離のハンデがあるため価格を抑えたレベルにすることを山元に理解させることという2大問題を抱えた、それは大変な苦心と熱意を要する交渉でした。そのような難しい交渉の最中でも小川さんはあの笑顔を絶やさず、弱気になりがちな私たちを叱咤激励し続け長期契約の調印に漕ぎ着けたわけです。

よき先輩であり、仲間であった小川さん冥土で待っていてください。冥土のアフリカと一緒に旅をして約束果たそうではありませんか。

合掌

山本寧雄さんの事

高 橋 正

7月初旬、余野木さんから山本さんが膵臓がんで川越の病院に入院する旨の連絡が有り、直ぐ山本さんにメールで状況を問い合わせた処、新宮の病院で膵臓がんが見つかりステージ4で肝臓にも転移があり余命三ヶ月との診断を受けたので駆ってより西洋医学と東洋医学の両方を取り入れ個人の病状に応じて対応してくれる川越の帯津三敬病院にセカンドオピニオンを求めた結果、其処に7月11日から入院する事にした。

残念な事になったが誰にでも何時かは来る事と思い淡々と対処して行く積りであるとの返事が有りました。

入院直後では検査等面会の時間が取れないと考え入院から10日後の7月21日に余野木さんと川越の病院にお見舞いに行きました。

以前と比べて少し痩せた様に感じましたが、食欲も有るとの事でしたので雑談室で一時間程雑談をして帰りました。

その後、一時退院され娘さん夫婦の所に居られましたが、再入院され10月30日早朝穏やかな表情で苦しみ事無く眠る様に息を引き取られた旨娘さ

んより連絡が有り、ある程度気持ちの整理はしていた物のこれ程早く逝かれるとは思って居なかったのでショックを受けました。

娘さんによると10月23日に初孫が誕生し10月28日にお孫さんのビデオを見せた処大変喜ばれ安堵されてたとお聞きしせめての慰めと感じています。

かなり進行した癌である事を告知され心の葛藤は如何ばかりであったかと思いますが、お見舞いの際そんな素振りは一切見せず淡々とされていた事が心に残っております。

山本さんと私が初めて会ったのは私がモスクワに赴任した1989年5月初旬でした。それ迄担当品目や駐在地が異なった為お互いに知りませんでしたが、ソ連邦の事を全く知らない私を山本さんは次長として本当に良く支えて呉れました。大阪外大のロシア語の出身でモスクワ以外にもニューヨークやワルシャワ等にも駐在され大局的な立場から良く商内を纏めさらに現地雇員への対応も見事な物でした。

色々な商いの中で食料公団とのコーヒーの契約



クロアチアにて
向かって右端 故山本寧雄さん、左端筆者

が一番懐かしい思い出です。公団からコーヒー約七百万ドルの引き合いを入手その商内で見せた山本さんの粘り強い交渉力は素晴しくロシアはその頃外貨不足の状態でリスクは有りましたが、無事全額入金し商内が完結した時は喜びを分かち合いました。

ニチメンを退社後、興味を持たれていた東欧諸国の中からクロアチアを選び移住され料理の上手な奥様とザグレブで日本料理店を開こうと検討されていた時期もありました。

今、私の本棚に山本さんがザグレブ大学の二人の教授と共同で執筆された“サムライと騎士”（副題：日本はどの様にして経済を発展させたのかークロアチア成功への道筋）が有ります。日本語、クロアチア語、英語の三ヶ国語で書かれ、内容は日本の歴史、文化、社会、宗教、教育、経済成長

の過程等多岐に亘りクロアチアは今後どの様な方向に進むべきかを論じた三百頁を超える提言書です。

又、“クロアチアのアドリア海”と言う観光ガイドブックの翻訳、編集もされています。

これ等を読むと山本さんがクロアチアを如何に愛していたかが伺えます。

クロアチア人の親しい友人も沢山居られ大学の講師もされていましたが、奥様を亡くされた事も有り三年前に帰国され故郷の新宮でボランティア活動をされていました。これからの活動を地元の方も大変期待し本人も遣り甲斐の有る仕事と言われていただけに残念でなりません。

誰からも親しまれ決して怒った顔を見せた事の無いナイスガイ山本さんが亡くなられた事は今でも信じられませんが、死を現実として受け止めご冥福を心よりお祈り申し上げる次第です。



追悼 岩下恒則さん

埴 生 榮 勇

2012年11月24日、7年間に亘る闘病生活を経て、遂に天に召された。

岩下恒則さん、昭和33年（1958年）入社、海外経理からバンコク支店勤務、後に業務本部やニチメン衣料にて活躍される。

特に記憶にあるのは業務部時代、海外店の計数管理のシステムの導入、事務の効率化に貢献した事など。

若き日の岩下さんは、同年代の男女社員が自主的に結成したMr.ファープッシュ（京都女子大講師）の英会話クラブなどにも積極的に参加した。

なお西宮の老舗“播半”での英国人ムーア先生

夫妻による社交ダンス・クラブにも熱心に参加した。また、俳句も能くし、かつ珠玉のエッセイをホームページに載せて多くの読者を魅了した

温和な人柄で、かつ何事にも積極的で、健康にも人一倍留意していたのに

病魔には勝てなかったようだ。

社友会『会報』No.5とNo.7に秀逸なエッセイを寄稿した。

特に、No.7の『ウイーン我が夢の街』（ズィーチンスキー作曲）は心に響いた。

その歌詞さながらに彼は旅立って逝った。

ご冥福をお祈り致します。



2007年4月20日“大33会” 於 Blue Wave Inn 浅草

*後列左から3番目に岩下恒則さん

*その他の方々：（前列左から）故広田孝夫、故因幡忠顕、倉又則夫、鎌田亮三、坂井啓治、埴生榮勇（後列左から）長谷川洋、中原正紀、故岩下恒則、栗田久彌、阿賀信夫、故村上欣也

【編集後記】

またまた廻り来た年の瀬、そしてお正月、われらSunset peopleにとっては、人生のマイルストーンを又一つ踏み越えることであり、欣喜雀躍の季節とは言い難いが、家族と共に新しい年を迎えることを慶賀したい。

余談だが、先日の新政党；“太陽の党”は英字新聞で、“The Sunrise Party”と載っていたが、直ぐにドボンとなって日没となってしまった。
われらSunset peopleの方が長命であることを喜ぶたい。

東京社友会世話人のチャーター・メンバーは、明けて2013年、その任期は8年目に入る。

われら編集三人組も同様である。心身の経年劣化が危惧されています。

新進気鋭な若手OBの参加を望むこと切なるものがあります。

今度、39年入社の園山春一さんが世話人として参加してくれたのは何よりの事です。

会報No. 12で竹内可成さんが紹介していた“メメント・モリ”（Memento Mori）という言葉は、原義“死を忘れるなかれ”（Remember that you have to die）を思い起こしてください。
忘れずとも、その時は必ずやって来ます。

会報を編集していて毎回心が悼むのは、半年毎の物故者リストの掲載である。

またまた思い出深い人々が幽冥境を異にされた。

たしかに散らない桜は、桜でない如く、死なない人間は居ない。

今回は蜷川親秀さん、堀之内敬さん、小川宇士雄さん、山本寧雄さん、岩下恒則さん

5名もの追悼文を載せて、夫々のご冥福を祈ります。

明けて1月17日、社友会の新年会は、双日の新ビルの会議室で行います。

本誌の冒頭で、ご案内しております。

どうぞ風邪等に気をつけて、ご健勝に過されて、一緒に新年を寿ぎましょう。

（ 長谷川 洋 ）

ニチメン東京社友会

〒100 - 8691 東京都千代田区内幸町 2 - 1 - 1
飯野ビルディング17F

発行人	倉又 則夫	代表世話人
編集責任者	長谷川 洋	世話人
アドバイザー・スタッフ	高木 亨一	世話人
	倉持 次雄	世話人
印刷所	(有) 関内	印刷